
廻る荒廃、甦る平穏

一二三四五六

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

廻る荒廃、甦る平穏

【Nコード】

N7255J

【作者名】

一二三四五六

【あらすじ】

時は新世界暦2740年。人類は地球を捨て、『緑星』と呼ばれる地球によく似た星に住んでいた。

『緑星』の第3生活地区に住む少女、レイオール・フランチェは、夏休みまで残り僅かである日々をいつものように過ごしていた。そんなある日第1生活地区に隕石が落ちたことにより、『非日常』の歯車が回転を始めた――。

『綴り手』『読み手』『この世界』『カシエ』そして、破滅まで

の『九日間』。

クールに、時に人間臭く悩み懊悩するレイオールと、レイオールに謎を運んだ少年ラミアス。

二人の、若くそして剽悍に『人類滅亡』を阻止する過程の備忘録。

現状を知ることが可能性に繋がるならば、これもまた未来の可能性の物語。

The day before Act・1 『始動』

The day before Act・1 『始動』

西暦2741年某日

その昔、人類は地球と呼ばれる、唯一生命が生きていたとされる惑星に住んでいた。

そしてその年地球から、無数の宇宙船が発射された。宇宙船には、地球の人口の半数が乗っていた。そして、残りの半分は、地球と共に滅び行くことを選んだ。

そう、地球の環境は脆くも儚く、およそ900年にも及んだ人類の環境破壊行為に耐えられなくなったのだ。そして発達した科学力を以ってしても、その環境が元に戻ることはなかった。

宇宙船は様々な銀河を彷徨い、ある星系を見つけた。——それが、新星系『中央星系』、私たちが今住んでいる場所である。

人々の大半は、地球によく似た『緑星』に住むことを決めた。そこには地球にも似た、豊かな自然と恵まれた気候があった。

『中央星系』には、他にも『炎星』『光星』『影星』などがあり、それぞれとても恵まれた資材がある。人類はその資材を元手に、新たな歴史を紡ぎだしていったのだ。

少女は本を閉じ、退屈そうに欠伸をした。

少女の髪は黒く長い。腰まで届きそうだった。瞳は琥珀色。顔は美しく、目鼻立ちが調っている。おそらく10代後半。着ている服は、紺色のワンピース。袖口や裾にレースがついている。

何処かの御令嬢を思わせる、可憐な少女だ。

少女は椅子から降りると、静かに窓に近づいた。カーテンは閉じ

ており、室内を暗くする一因としていた。

「お嬢様、この依頼を受けるのですか？」

年老いた優しい男は、少女に向かってそう言った。その声は、心なしか震えている。

男は心配しているのだ。この少女が暴走してしまうのではないかと。

少女はカーテンを勢いよく開けると、男のほうに振り向いた。その顔には、不敵な笑みが浮んでいる。その笑壺に男は戦慄した。

「ええ、勿論よ。頼まれたことをするのが、私の仕事。だから、この依頼も受けるわ」

窓の外には、平和な森が広がっている。その平和さを恨めしく思う男の気持ちなど、この少女には知れているはずである。

「……そうですか」

男は諦めたようにそう言うと、黙って部屋を出た。その手には、部屋にいる少女宛の、赤い蠟で封をされていた封筒が握られている。開封されていて、中身は空だ。

男には、少女がこれからする『仕事』の内容が知らされている。

それはこの少女にしか出来ないであろうこと。精神面でも、技術面でも。

少女がこれからする『仕事』は――

The day before Act・1 『始動』（後書き）

未来って、なんでしょう？今と変わらないかもしれません。

……なんか哲学的な言葉ですが、深い意味は有りません。
たまに考えませんか？10年後とか。

その10年後にも、今と同じように子供とかがいるわけですよ。
じゃあ、3400年後にだって、少女はいるわけです。

今よりも科学が発展してても、きっと人間の心は変わらないと思います。

これは未来モノお話で、科学じゃ証明できない力が出てくるけれど、彼らの日常はきつと今の私たちと同じだと思うんです。

……では、次のお話で会いましょう。

Act・1 『日常と序章』

新世界暦2740年

宇宙の遙か彼方、『中央星系』の『緑星』に、人間と呼ばれる動物が暮らしている。

『緑星』は美しい緑と暖かな気候に恵まれた惑星で、人間の半数以上は『緑星』に生活の拠点を置く。

その『緑星』の中にある第3生活地区の大通りに、少女はいた。少女の瞳はこの時代でも珍しい灰色。髪の毛は肩甲骨より下の辺りまで伸びていて、色は焦げ茶。パリッとしたジーンパンの上に、長袖のシャツを着ている。袖の長さは左右バラバラで、左のほうが短い。左腕だけが、鋼のような灰色をしている。

「よお、レイ。今日も買い物かい？」

八百屋から、野太い男の声がした。

声をかけた男の顔は、声からもイメージできるような所謂『強面』だ。

レイと呼ばれた少女は、無愛想に男を見た。

「そうだけど、何？」

氷も凍てつくほど冷たく言い放った少女の名は、レイオール・フランチェ。第3生活地区の学習棟に——学校に通う16歳だ。『緑星』では、必須学習年齢——義務教育は20歳まであり、それまでは学習棟に必ず通うのだ。

「いや、お前さん最近よく買い物行くなーと思って」

男はたじろぐことなく、けろつと答えた。

「それだけなら、いちいち呼び止めないで」

レイオールは苛立たしげにそう言い放つと、すたすたと歩き出した。

「ハハハ。相変わらずだなーレイは」

男は楽しそうに独り言を言った。子供の頃から変わらない、レイオールの中を見ながら。

レイオールは南に向かって歩いてた。目的は、ただ一つ。両親の墓前に供える花を買うこと。

レイオールの両親は、レイオールが5歳のときに死んでしまった。家族で旅行に行った帰り道に、突っ込んできたトラックに潰されたのだ。その時に、レイオールも左腕を失った。病院に運ばれたレイオールは、使えなくなつた左腕を『兵器兼義手』にすり替えた。

この『兵器兼義手』は、本人の意思に関係なく、体の一部を失つたら必ず着けるのだ。そしてそうなつてしまった人は、年齢に関係なく学習棟の機械体保持生徒用戦闘技術科——機戦科に通い、戦闘技術を叩き込まれる。卒業時の能力が平均並みか低ければ、健常者とあまり変わらない暮らしができ、逆に能力が高ければ警察組織に入り、その後には戦闘部隊に配属されるのだ。つまり、警察組織の人員確保のためのエゴなのだ。

レイオールもその一人で、機戦科に通っている。その傍ら、暇なときには花を買って墓前に供えているのだ。

この日は宿題もなく、夏休みが間近なものもあり、授業は早く終わった。レイオールは友達が少ないので、そんな日は他の生徒より数段暇になるのだ。

左側に、見慣れた花屋のドアが見えた。

いつもの様にマーガレットの花束を買って、来た道を引き返した。両親の眠る墓に向かって。

北に向かって歩くと、右側に細い道がある。その先の霊園に、レ

イオールの両親は眠っている。

レイオールは花束を墓前に供えると、ゆっくりと歌いだした。高音が響く、幸せな親子の様子を謳った歌は、授業で習ったものだ。最後の一音まで歌い終わると、レイオールはゆっくりとその場を離れた。

枝分かれのない石畳の一本道を引き返すと、先ほどの大通りに出る。帰るために北に向かって歩くと、八百屋と酒屋が見えた。

「ただいま帰りました」

酒屋に入ってそう言うと、レイオールは階段を上って自室に入った。

荷物の少ない自室に入ると、レイオールはベッドに倒れこんだ。仰向けになると、染みのない真っ白な天井と、飾り気のない照明がよく見える。

どれ位そうしていただろうか。眠っていたかもしれない。

「レイちゃん、ご飯ですよ」

下の階から、おばさんの声がする。

レイオールはムクリと起き上がると、のそのそと階段を下りていった。今日の夕御飯はシチューだな、とか考えながら。

こうしてレイオールの日常は、積み重なっていく。

レイオールが夕御飯を食べている時、第1生活地区に隕石が落下した。

緑星に隕石が落ちるのは珍しく、その殆どは大気圏で消滅するか、となりにある影星に落ちる。そのためマスコミは大騒ぎし、専門家に話を聞いてみたり、目撃者に取材してみたりした。そして、すぐ

にテレビで報道され、新聞記事も作られた。

そうして、1時間で殆どの人がこの出来事を知った。——しかしその情報は、真実ではない。報道された内容は、

- ・第1生活地区に、隕石が落下したこと。

- ・緑星の近くにある隕石郡から落ちてきたこと。

- ・大気の摩擦のせい、隕石は小さくなっていたこと。

- ・目撃者によると、流れ星（隕石）が見えなくなった直後に大きな揺れがあったこと。

が主で、何故落ちてきたのか専門家による解説があったり、これまでに落ちた隕石について今回の落下に照らし合わせてみたり、内容は番組や記事によって様々だった。

しかし、真実を知る者は三人だけだった。

第3生活地区某所

少女はラジオを聴いていた。流れているのは、隕石についてのニュース。

少女は満足そうに微笑みながら、ラジオの電源を切った。琥珀色の瞳に映るのは、ただただ純粋な悦び。

「人って、自分達に予測及び理解できないことが起こると、すぐに理解しようとするけれど、」

少女はそこで言葉を切ると、窓の外に目を向けた。そこには、深緑の森がある。

「世の中、本当に理解できることなんて、全く無いのよ」

向かいに座る少年に目を向けると、少女は真面目な口調で『仕事』についての打ち合わせを始めた。

「…とりあえず、私の『力』は信じていただけたかしら。『読み手さん』」

『読み手』と呼ばれた少年は、ニッコリと頷いて答えた。

「ええ、勿論です。それに、僕は最初から信じていましたよ」

「…それで、『仕事』について、詳しく聞かせていただきたいのよ」少年は少し顔を引き締めると、『依頼』をゆっくりと口にした。
「手紙でも言いましたが、あなたに依頼するのは…」

——それは、人類にとって不都合なこと——

翌日、レイオールが通う学習棟では、当然のように隕石のことが話題になった。

「レイ、昨日の隕石、知ってるよね」

そう話しかけたのは、レイオールと同じ機戦科に通う、数少ない友人の一人。

「知ってるけど？」

レイオールはそう言いながら、2時限目に出された夏休みの宿題を片付けている。

「あれね、聞いた話によると、誰かが意図的に起こしたらしいよ」

「あっそ」

レイオールは素っ気なく返事をする、訓練室に移動する準備をした。

機戦科に通う生徒は、3時限目以降は戦闘訓練をする。

この学習棟には、他にも普通科や、お金持ちの子供たちが通う社交科がある。普通科と社交科には制服があるのだが、機戦科は私服登校だ。これは、人によって『兵器』の場所が違うからである。

学習棟では1時限50分、1日5時限ある。2時限目と3時限目の間には、40分の休憩がある。

時間割はクラスと学科によって異なり、レイオールがいる機戦科

11-Sは、同じ機戦科の11学年の中で最も優れているクラスなのだ。そのため、授業は他のクラスに比べて、発展的内容や高度な内容が多い。

その中でもレイオールは、常に成績上位だ。このままこの成績を保てば、確実に戦闘部隊の中でも重要な地位に就くことができる。

「行くよ」

レイオールは友人にそう言うと、訓練室へと続く廊下を歩き始めた。

「待つてゝ、置いてかないでゝ」

そう言われて待つ奴はいないな、と思いつつ、レイオールは立ち止まるのだった。

振り向きは、しなかった。

廊下を歩きながら、レイオールは思う。さっきの友人の言葉は、軽く流していいものではなかったのでは、と。

『意図的に誰かが起こした』

あれほど大規模な隕石を、意図的に落とすことなんて可能なのだろうか。

しかし、自然に起こったとしては、不自然なことが多いような気がする。

意図的に。意図的に。意図的に。

どんっ！

ぶつかった。レイオールが立っているということは、相手が倒れたということ。

レイオールは相手に手を差し伸べた。因みに無言で。と、そこで動きが止まった。

水色と灰色の、タータンチェックのスカートとリボン。――つ

まり、社交科の制服。

レイオールの動きが止まったのは一瞬で、何事もなかったかのうに、そのまま相手を起こした。機械化されていない、細い右腕で「ありがとう。あなた、機戦科ね。もしかしくなくても、Sクラスでしょう？」

いきなりそんな事を言われて、戸惑った。

自然に話しかけてくる初対面の少女に、なんて答えればよいのやら。ただでさえ話すのが苦手なレイオールにとっては、今すぐ逃げ出したい状態だ。しかし、よく解らないが口が勝手に動いた。

「はい。あなたは社交科ですね？」

「ええ。せっかくだからお名前を聞いてもいいかしら」

このとき隣にいた友人が何かしていれば、レイオールが自分の今の異常さに気付いていたら、誰かがこの少女に話しかけていたら――

「レイオール・フランチェです。機戦科11-Sクラスです」

黒く長い髪を持ったその少女は、にっこりと微笑んだ。

「ユレーム・フィルムネルンよ。社交科の13-Sクラスよ」

――そして、歯車は徐々に噛み合わさっていく。

少女がいた部屋で、少年は読書をしていた。

少年は明らかに未成年で、学習棟にいないかもしれないのだが、構うことなく黙々と読書を続けている。と、ある行で目を留めた。

『もう一人の綴り手を抹殺する』

その行の上には、日付も記されていた。それは、この日から9日後となっている。

少年は口笛を吹くと、純粹無垢な子供のように笑った。

「…うわあ、さっすがお嬢様！庶民とはやることが違うねー！」

そう言つと、今度は真面目な落ち着いた口調になった。

「でも、だからこそ成功するとは限らないんだけどね」

誰もいない部屋で誰かと会話するように呟かれた言葉は、そのま
ま誰の鼓膜も揺らすことは無かった。

少年は目を眇めると、何かから逃げるように、スキップで部屋か
ら出て行つた。

足音は、しなかった。

コンコンツ

部屋の扉がノックされた。

ノックした男は何も言わずに部屋に入ると、迷わず窓に近づいた。
窓の外に広がる森は、前に見たときよりも色がくすんだように見
える。元気がなくなつたようにも見える。小さくなつたようにも見
える。

だが、男には止められない。いくら足掻こうとも、机の上に置か
れた本の持ち主に掛かれれば、男の命すら簡単に亡き物にできる。

男は小さく溜め息を吐くと、部屋の掃除を始めた。
いつものように、丁寧に。

本の持ち主は学習等で、残り僅かな移ろい往く平和な世界を過ご
している。

そして今、思惑を実現させるために動いている。

訓練室の角に、レイオールと友人は佇んでいた。

あれからユレームと二言三言話し、逃げるように訓練室へ入つた
のだ。

「美人だつたね」

友人は笑顔で言った。しかし、レイオールの頭に届くことはなかった。

何故、あの時あんなに話すことができたのか。

何故、ユレームは自然に話しかけてきたのか。

『何故？』がレイオールの頭の中を交差して、絡まった毛糸のようになんかこしくなっていく。

「レイー？どうしたの？オーイ、話聞いている？」

目の前で手をひらひらされて、ようやく友人の言葉が頭に入ってきた。

「どうしたの？具合とか悪い？それともさっきの美人さんの事とか考えてる？」

「いや、大丈夫」

「考えすぎは体に毒よ。それより、ホントに話聴いてなかったでしょう」

図星。

レイオールが首を縦に振ると、しょうがないなと言わんばかりに溜め息を吐いた。

「じゃ、もう一回だけだよ。これは、ただの噂なんだけどね……」
そして、語りだした。

「教室でも言ったけど、あの隕石って誰かがわざと落としたらしいよ。でね、遂に緑星滅亡の危機だ！ってインターネット掲示板で盛り上がってるらしいよ。……何がそんなに面白いんだかね」
同意見だ。口には出さなかったが、洞察力、観察力に優れた友人なら解っただろう。

「そんでね、ある人がこう書きこんだんだって」。

『俺、聞いちゃったんだけど、何処かの誰かが人類滅亡を目論んでるって噂、案外本当らしいんだ。第2生活地区の路地裏で、スーツ着た男×2がコソコソと、お嬢様がどうか、人類滅亡も近いとか、隕石がどうか、まるで警戒心0で話してて……。何の事か、よく聴こうとして近づこうとしたんだけど、スーツ男がこっち見て……。ホ

ント怖かった！」

…で、その書きこんだ人は、この書きこみの後、二度と掲示板に現れなかったらしいよ」

「殺られたね」

キツパリと言った。

「あ、これ噂だからね、噂」

友人は朗らかに笑い――

「…と、言いたいところなんだけど」

――『ただの噂』の可能性を、あっさりと否定した。

「その掲示板に行つて確認したんだ。で、そしたら本当みたいなんだよね。実際に一つ一つ見たんだけど、確かにその人は、さっき言った書き込みをしたあとはもう書き込みしてないんだよ」

でもそうになると、人類滅亡の話とか、口封じのこととか、全部本当の話になる。まるで現実味がないけれど。

「くおおらああーっ！」

怒られた。というよりも、怒鳴られた。

「おみやー等はいつまでこんな所でさぼつとるのじゃあ！とつとと訓練始めろっ！」

訓練官（既婚・37歳・愛妻家）はそう怒鳴ると、レイオールの友人を見て、集中的に怒鳴り始めた。

「おみやーは優等生をも巻き添えにして、そんなに落第したいのかあ！大体、何でお前みたいな不真面目な生徒がこのことSクラスで授業受けるかなあ？もうそろそろAクラスに落ちるぞあ！それに――」

「行く」

訓練官が怒鳴るのを遮つて、レイオールは友人と逃げた。

「待てえいっ！おみやーらそんなにAクラスに落ちたいのかあ！おいこら、逃げるなあ！」

訓練官が怒鳴りながらこちらに走ってくる。しかし、Sクラスでも10位以内に入るほど足の速い二人にとっては、校庭で新入生と鬼ごっこをするような気軽さで楽々と逃げられる。

「おー、やってるやってる」

「またかー。教官情けねー」

「よくあれで結婚できたよなー」

真面目に訓練している生徒でさえ、このお決まりの風景には声が出てしまう。

レイオールと友人が入学してから恒例となったこの風景は、訓練で疲れきった生徒に、少しの笑いと、少しの安堵感を提供しているらしい。

いつもと変わらない、安心。

ま、それが日常という奴だから。

少年は、部屋から窓の外をぼんやりと見ていた。

空のように澄んだアクアブルーの瞳は、似ているようで違う、本物の空をその瞳に映していた。

雲はゆっくりと流れ、やがて視界から消えていく。その繰り返し。

少年はあまりにも暇なのか、椅子から立ち上がり、窓の外に身を乗り出して――

飛び降りた。

「よつと」

少年は苦もなく着地すると、芝の上に寝転んだ。念のためここで記述しておくが、少年がいた部屋は4階にある。

ぼんやりと空を眺める少年の髪を、時々風が遊ぶ。そのことを特

に気にした訳でもないのだが、上半身を起こして左手で前髪を後ろに梳いた。何度かそれを繰り返すと、少年は立ち上がって伸びをした。

徐々に西へと傾き始めた『炎星』に背を向けると、少年は忽然と姿を消した。

後に残ったのは、窓が開いたままでカーテンがたなびいている部屋を4階に設けた建物と、何事も無かったかのよう日光浴をする芝、それから、全ての木が葉を落とした、砂漠化が進むかつては森だったもの。

あと、強いて言えば、前髪を梳いたときに抜けてしまった、日に翳すと薄茶に見える、灰色と薄茶の中間の色の髪が数本。少年が消えてからしばらくして、風に飛ばされたわけでもなく、自然と陰になって消えていった。

全てを詳細に見ていたのは、人と意思の疎通が図れないような蟻たちだった。

部屋の掃除をした男は、そのことに気付いていたが、何も言わずに、紅茶を上品に飲んでいた。

ついでに言ってしまうと、建物の中には毛並みの綺麗な猫が一匹、徘徊していた。この建物と人々の異常さを知ってか知らずか。

全貌は、神様にもわからない。

この建物もすでに、神様の決めた理が少し歪められた場所にあるのだから。

少年も、男も、猫も、森も、家主も、少女も。

神などこの世界にいないとも言つように――

少年は町を見下ろしていた。別に意味は無いのだが、こうしてい

る事で、心を落ち着かせることができる。

決して干渉できない、非現実的な現実。

それが、少年がこの町に抱くイメージだ。深い意味は無いのかもしれない。ただ、真実と見たままを述べただけかもしれない。少年には、それ位しか解らない。

干渉できない——訂正、干渉されないこと。あるいは、その両方。

少年にとっては、目の前の風景は画面の中の世界のように、薄く膜が張られたようなのだ。

はあ、と溜め息を吐くと、少年はゆっくりと扉に向かった。扉を開けると、その先は階段。階段の下では、緑を基調としたタータンチエックのスカートを穿いている女子が目についた。なにやら雑談をしているようだが、少年にはさっぱり内容が解らない。

私服で歩いているのに、誰も咎めない。それどころか、今は授業中らしく、廊下には誰もいない。先程の女子はサボりらしい。

しばらく歩くと、また階段が見えた。

なんとなく降りると、まだ降りられるらしく、階段は折り返しながら続いている。特にすることも無いので更に階を降りると、もう続きは無いようで、階段はそこで終わっていた。ここが1階らしい。やはり廊下には誰も居らず、少年はきよろきよろと辺りを見回した。昇降口らしきものが、ポツンと口を開けている。その向こうには、巨大なホールのような建物がある。

なにやら怒鳴り声が聞こえるので、そちらには行かないことにする。廊下の反対側には、渡り廊下がある。少年はそちらに行くことにした。

廊下を歩いていると、教室の中から聞こえる音が気になってきた。擦るような音、引き摺るような音、叩くような音。

音で程よく満たされた廊下を音も無く歩くその少年は、やはり場

違いなように見える。

渡り廊下を抜けると、先程までの古びた感じはなく、真新しい感じがする。

装飾は細かく鮮やか、かつ上品。色使いも落ち着いていて、何処かのお屋敷かと思ってしまう。まあ、本当のお屋敷にはどこか及ばない部分もあるのだが。

少年は、ふと気付いたように傍の階段を駆け上った。

（——ただの直感だ。根拠なんて何処にもないのだが、やはりあいつは何か企んでいる）

止めなくては。替えさせなくては。

これ以上ややこしくされたくは無い。

少年は焦る心を抑えられなかった。

——キンコンカーンコン...

鐘が鳴る。焦る気持ちを増幅させる音を背中に受けながら、少年は駆け続けた。

A c t・1 『日常と序章』（後書き）

この章も、ある意味では序章なんです。けれど、運命の歯車は、既に音をたてて回転を始めているんです。

これは、ブログに投稿している小説をまとめて投稿しているものです。

十話分溜まったら、それが一章分です。

本当は一話一話サブタイトルがあるんですが、こちらでは新しく付け直しました。

Act・2 『After school』

——キーンコーンカーンコーン……

この日、午前授業のみの学習棟では、3時限目終了のチャイムが鳴り響いていた。

訓練室は無人となり、扉には鍵が掛けられている——筈だった。

一人の訓練官と二人の生徒が、追いかけてくことをしていた。

「待あてこるあつ！」

訓練官が、顔に青筋を立てて叫んでいる。

その訓練官に追われている生徒は、長い焦げ茶色の髪を靡かせて走っている。

生徒は壁へ向かって、疾風の如く走る。訓練官は不審に思いつつも、その生徒の後ろを追いかける。因みにもう一人の生徒は隙を置いて、この時脱出している。

生徒は壁にぶつかる寸前、向きを180度変えて、壁を打ち抜く勢いで蹴った。生徒は訓練官に向かって突っこんだ。訓練官はその動きに反応できず、すぐ近くをすり抜けていった生徒に手を伸ばすのが遅れてしまった。

生徒は扉に向けて駆けた。扉の向こうには、先程訓練室を出て行ったもう一人の生徒が居た。

もう一人の生徒は、口に手を当ててメガホンの形を作った。そして、

「もうそろそろ現役引退したほうがいいよ、おっさあ〜ん」

訓練室で鼻を押さえてうずくまる男に向かって、ありったけの大声で叫んだ。

「じゃ、今日はこれで。さいなら、レイ」
「じゃ」

レイと呼ばれた生徒は、もう一人の生徒——友人が、黒塗りの自家用車で帰るのを校門の外で見送った。

レイは、車が去ったのとは逆方向に進みだした。
しばらく歩くと、大通りの喧騒が耳に飛び込んできた。

自分が下宿している酒屋の前を素通り、隣にある八百屋も素通り

「よお、お前また買い物か？こりねえ奴だな。昨日も一昨日も行ってたじゃねえか」

——できなかった。

「別に。下見だけだし」

レイは——正確には、レイオール・フランチェは、声を掛けてきた八百屋のおじさんにそう言い放った。冷たい視線も、この時一緒に放った。

「そうかあ？ここ最近ずっとじゃねえか。そんなに諦めきれないものなら、俺が」

「いい」

なにやら一人で盛り上がられたので、早々にレイオールは話題を切り上げた。

「別に遠慮することねーんだぞ？お前は小さい時から」

「いい」

「だから」

「いい」

「お」

「いい」

「…まだ何も言ってない」

切り上げたはずだったのだが、いつまでも食らいついてこられた。しょうがないので、レイオールは本当の事を言うことにした。た

だし、花を買っていることは話さなかった。

話し終わると、おじさんは静かに一人で頷いた。

「そうか、そうだったのか…。いや、訊いて悪かった。そうだよ、人には誰しも、他人に言いたくないことの一つや二つや九つはあるよな。そうだよな…」

なにやら自己完結された拳句、話がどこかずれてしまった。しかしレイオールは非情にも、一人で頷いてる隙に逃げ出した。

大通りの人混みに紛れて、霊園に続く細い道へと向かう。花は、今日は持っていない。

大通りの喧騒を感じさせない細い道を、レイオールは何の感慨も無さそうに歩く。

細い道を抜けると、いつもと変わらず、ただただ墓石が鎮座していた。

レイオールは、いつもの様に両親の墓石の前まで歩いた。そして、歌は歌わなかった。

ただただ、そこでじっとしていた。何もせず、視線を墓石に固定したまま、時が止まったように動かなかった。その姿は、一種の亡霊の様でもあった。

どれぐらいの時間そうしていたのか、レイオールにも分からなかった。けれど、あまり時間はたっていないようだった。

レイオールは立ち上がると、元来た細い道へと歩き出した。

石畳の細い道は、この町の戦争時代の名残。

新世界暦842年。資源が豊富で緑の多いこの星は、戦場と化した。その資源を巡って、その自然を巡って、その豊かな土壌を巡って、貪欲な人々は、周囲の人々を巻き込み、散々暴れまわった。後に人々はこの戦争のことを『緑星争奪戦争』と呼んだ。

『緑星争奪戦争』によって、多くのものが即死し、溺死し、餓死し、自殺し、銃殺され、刺殺された。

建物は爆破され、撤去され、倒壊した。

多くの建物は、戦争が終わった後に新しく造られた。その殆どが、要塞のようなコンクリートで作られた。その中でこの町は、兎に角異彩を放っていた。

白い土壁、赤い瓦屋根、暖かな暖炉、そこから伸びる、茶色い煙突。

道は石畳で、一步奥に入れば、迷路だったり、一本道だったり、近所の住民ですら迷うことがあるほど入り組んでいる。

地球のヨーロッパを思わず、不思議な町になった。

新世界暦1058年、近くにある第4生活地区の地区長及び幹部の人々は、平和な日々には何も価値がなく、意味のないことだと思い始めていた。やがてその考えは肥大し、戦争を無意味に起こすまでに至った。

その標的になったのは、第3生活地区。理由は、ただ単に近かったのと、第3生活地区が他の地区と比べて裕福だったため。この頃の第3生活地区は、物流の要とまで言われるほど、多くの物が、人が、金銭が行き来していた。このことを利用して起業し、成功する者も多かった。何より、地区長は賢く、温厚な人だった。そして、善悪の判断は情をはさまず常に公平だった。それが自分の息子でも、悪いことをしたなら相応の罰を与え、それが浮浪者でも、良いことをしたなら相応の礼と褒美を与えた。そんな人だった。そして、平和を愛する人だった。そのため、町も平和だった。

平和だったから、恰好の餌食にされるはずだった。

新世界暦1059年5月24日早朝、第4生活地区の軍は、光線銃や特殊な爆弾を装備し、頑丈な戦闘服を身に着けて、第3生活地区へと攻め込んだ。唯一つ難点があるとすれば、軍人の殆どが半年以上訓練を受けていない素人だということ。第4生活地区の幹部は、

軍が成長するのを待てなかったのだ。

戦争は、意外にも短期間で終了した。

第4生活地区の軍は、まず大通りを爆破。他の地区に続く道は全て封鎖された、はずだった。全ては封鎖されなかった。軍は、細い抜け道を見逃していたのだ。近隣住民しか知らない、幾つもある避難通路を。避難通路は、後から急ピッチで作られたものではなく、相当前からあったものだった。

新世界暦842年、『緑星争奪戦争』の直後から、ずっと。

事前に情報を得た第3生活地区の住人は、必要な荷物を持ち、避難通路から非難した。5月23日の昼間には、第3生活地区からは人氣が消え去った。

第4生活地区の軍は、まんまと騙されたわけだった。

人の居なくなつた第3生活地区で、第4生活地区の軍は、どうしたか。

建物を破壊し尽くすような、愚かな事はしなかった。それよりも、更に愚かなことになってしまったのだ。

軍から逃げ出す人が居たのだ。

逃げ出した軍人は容赦なく殺された。その場で銃殺。

それに反発した軍人が、発砲した軍人を襲った。その場で絞殺。

やがて軍は、内部で二つの組織に分かれていた。組織に属さない軍人は、どちらに付くか答えを出せずに、虐殺、撲殺された。

二つの組織は愚かな小競り合いを始めたのだ。第3生活地区という、他人の領土で。

そんな軍を、幹部は見捨てた。『この無意味な戦争は、軍が勝手にやったことで、自らは関係ない』と。後にこの時代の幹部は、皆例外なく断頭台にて処刑された。第4生活地区の住民の手によって。では、第4生活地区の軍は、どうなつたか。生存者が17名。それ以外のおよそ10万人は、皆死んだ。己の仲間であつた人々に殺された。

そして第3生活地区は、静かになった。

町には、死体が発する腐臭が満ちていた。死体に集った蠅もいた。脳漿や、骨や、肉片や、潰れた眼球や、ありえない方向に曲がった指や、変色した皮膚や、乾き初めて黒さが増した静脈血や、焼けた衣服と思しき炭や、半分だけ潰れた心臓や、首から上がなく鎖骨が肩から飛び出した胴体や、そんな物がいたる所に転がっていた。殺伐としていた。

誰も入ろうとはしなかったその場所へ、一人の旅人が入っていた。

その旅人は、軍の武器を集めた。そこらに転がる元生者たちは、旅人が公園で燃やした。それも、全て。

旅人は、売れそうなものは容赦なく持っていった。ただし、小さいものだけ。

旅人は死者を燃やした公園で、軍の武器を分解した。そして、希少価値のある金属があると、その金属を残して、元武器を適当にそこらに抛った。

次の日には、旅人の姿はなかった。誰も遭遇してはいなかった。故に、この旅人のことを知る人はいない。

だから今に伝わる歴史も、本来のものとは少し違う。
住民たちから見た、ありのままが伝わっている。

石畳の、細く入り組んだ路地。

枝分かれのないその道を、レイオールは何と無く歩いていた。目的が無いわけではない。帰宅するため、ただそれだけだ。

細い道の両側に聳え立つ白い土壁には、緑色の細く長い蔦が絡まっている。それは、この第3生活地区が古くからこの場所にあるこ

とを、無言で伝えている。

ふと、レイオール足の足が止まった。今まで意識していなかった聴覚を、ただ目に映ったものを脳に送るだけだった視覚を、そして警戒心を、鋭くして、レイオールはその場に佇んだ。

曲がりくねった道の先、ここからは見えない場所から、低い男の声が聞こえてきたのだ。それも、二人分。

それだけなら、レイオールも普通に通り過ぎることだろう。普通の人も、躊躇こそするものの、急ぎ足で通り過ぎるだろう。けれど、レイオールは二人の男が話す単語を聞いてしまった。

お嬢様。人類滅亡。それから、隕石。

それらの単語が意味すること。先程友人から聞いたこと。そして、今の自分のこの状況。

レイオールは理解して、そして笑いたくなくなった。これは、悪い嘘ではないか、と。

普段あまり笑わないレイオールがそう思うほど、今の状況は笑えないものである。

そして、嘘である可能性は確率は、残念なことに、半分よりも低い。

今ここから逃げ出すことも可能だ。けれど、レイオールは逃げなかった。確信があった。

逃げれば殺される、という確信が。

自分から今日を命日にしたくはないもので、それは世間で普通に生きる、何の変哲もない人間ならば、誰しもが思うことである。

だから、レイオールは逃げなかった。たとえそれが、自分から厄介ごとに首を突っ込むようなことでも。それを承知で、レイオールは逃げなかった。

それが誰かの意図にしろ、運命にしろ、偶然にしろ、レイオールの知ったことではなかった。

低い声の全てを拾い、全てを覚える。単純そうに思えるその作業は、実は困難な作業であつたりする。

まず、低い声の全てを拾うこと。

これには鋭い聴覚と、絶対に油断しないことを必要とする。

鋭い聴覚がなければ声は聞き取れず、油断をすると聞き漏らす。

次に、全てを覚えること。

これはまず、聞き取ることができなければ話にならない。つまり、鋭い聴覚と油断しない精神がなければ話にならない。更に必要なのは、記憶力。

『記憶力』と人は言うけれど、実際には、情報を脳に記す『記』、記した情報を分類する『分』、記された情報の存在を更に記憶する『再記』、過去に記された情報を思い出す『再生』、そして『再生』した情報から新たに発見した情報を共に保存する『共記』、過去に『再生』された情報と一致しているかを確認する『点検』。

その中でも「覚えること」「思い出すこと」「発見しそれを忘れないこと」が——つまり、『記』『再記』『再生』『共記』が特に必要となる。

つまり結論を言えば、『低い声全てを拾い、全て覚える』ことは、感覚器官感覚神経を研ぎ澄まし、それでもやはり難しいことである。人は誰でも油断をする。それは人間が生身の人間であっても、頭脳が電腦化されても変わらない。

だが——訓練され、「そういうこと」に長けた人間であれば、不可能ではない。

現に、レイオール・フランチェは『低い声の全てを拾い、全てを覚え』ている。

そして、男たちの会話も終焉を迎えた。男たちが、レイオールの方へと歩き出したのだ。

今までの会話を全て聴き、全てを覚え、おおそ理解したレイオールは、威風堂々と、何事も無かったかのように歩き出した。男たちの方向へ。

互いに視認できるところまで来て、互いの距離が縮まって、すれ違い、また距離が開いて、

レイオールは立ち止まり、男の一人は振り返り、

——発砲。

静かな細い道に、銃声が響く。

男の手に握られた細い筒状の銃の先端からは、青白い硝煙が立ち上っている。

筒状の銃から飛び出したのは、今では珍しい、鈍重な光を放つ鉛の実弾。レトロな実弾は、弧を描くことなく火薬が爆ぜる勢いを利用して、真っ直ぐにレイオールへと向かった。レトロな実弾は——レイオールへと届く前に、目に見えないモノによって消滅した。

静かな細い道に、銃声が響く。

レイオールの『義手』——今は『武器』となった左腕の先端からは、空気衝撃の余波が広がっている。

レイオールの左腕から飛び出したのは、今では珍しい、最新技術の集合体である、音エネルギーの塊。エネルギーの塊は、弧を描くことなく別のエネルギーに弾き出され、真っ直ぐに男たちへと向かった。エネルギーの塊は——男たちに届く前に、金属の塊を消滅させた。

エネルギーの塊は停まることなく男たちへと向かい、筒状の銃を

持った男の胸にぶつかり、その勢いを殺すことなくそのまま貫いた。

もう一人の男は、ただそこに立っていた。肉片になりつつあるかつての仲間を、ただ静かに見つめた。そこにはどんな感情も見出すこともできない。

そんな男の様子を知ってか知らずか、レイオールは歩き出した。人を殺すこと。そのことを後悔しているかと聞かれれば、後悔しているとしたか答えようがない。

しかし、他に選択肢がなかった。殺さなければ、殺されていただろう。レイオールの生存本能は、意地らしくも、生きることを選択した。世の中を何の変哲もなく平々凡々と過ごすたいいの人間は、今日という日を命日にしたくはないもので、それはレイオールも同じことであつた。

それに。

話を盗み聞くことにしたときから、何と無くこうなることは解っていた。

レイオールが人を殺し、男たちの仲間を敵に回すことも。

レイオールが人を殺しても、法律で裁かれることはないだろう。その代わり、男たちの仲間を追われることになるだろう。それは、死ぬまでずっと。

どちらにせよ、もう逃げられない。

もう一人の男はきつと、仲間に報告しただろう。だから、レイオールもすぐに追われることだろう。そうなれば、もう酒屋には居られない。第3生活地区からも出なければならぬだろう。

レイオールは、その事を別に気に病むでもない。

唯一つ心残りなのは、気軽に友人に会えなくなったこと位だろう。

事態は、少年の望む様にはなっていない。

こんなにドンパチやかすのではなく、静かに、一瞬で終わることを望んでいた。

…それなのに。

何故あの少女は、こんなに回りくどいやり方をするのだろう。

少年は居ても立ってもいられず、駆け出していた。

鐘のなる中、階段を最上階まで突っ走った。

ボタンツと屋上への扉を乱暴に開けると、そこには先客がいた。

「やはり来ましたね、待ちくたびれてしまつところでしたよ」

腰まで届きそうな黒く艶のある髪を風に靡かせ、少女は微笑んでいた。余裕綽々としたその表情は、どこか少年を苛立たせた。それと同時に、少年の戦意を削いでいた。

少女はゆつたりとした足取りで少年の目の前50cmほどのところで停まると、その口を開き、新たに言葉を紡いだ。

「苛立っているのは判りますけど、たったの1週間と少しですよ？それに、あなたの依頼は規模が大きすぎますよ。確実に成功させるための時間を、私に下さないかしら？」

少年は何も言わず、ただ目の前に居る少女を睨みつけた。

少女はそんな少年を見て、更に口を歪めた。

「化けの皮が剥がれれば、ただの短気少年ね…。でも、必ずあと9日必要なのよ。変更はできないわ」

「なん…っ」

何で、と続く言葉は、少女に遮られてしまった。

「もう、始まつたからよ…」

少年は、その言葉の意味を察した。

始まつたら、停まらない。それはもう、解り切っていた事だ。途中で後戻りなんて、できない。

昼間は雲ひとつない快晴だった空は、今は雨が降りそうな曇天となっている。

肌寒い空の下、遠くから、二つ重なった銃声が聞こえてきた。

授業終了の鐘が響く中、教室を一人の少女が出て行った。ゆったりとした足取りで、階段を駆け上った。確かに少女は歩いてははずなのに、走っているのかと思うほど早く少女は進んでいた。

授業の鐘が響き終わったとき、すでに少女は屋上にいた。その長い黒髪を風に靡かせ、曇天に移り変わりつつある空を、その瞳に映していた。

待つ時間は、そう長くはなかった。

「やはり来ましたね、待ちくたびれてしまうところでしたよ」

少女はニツコリと笑いかけた。少年は少女の顔を見て、少しむつとした表情になった。

少女はそんな事に構うことなく、少年の目の前50cmのところまで歩いた。ゆったりと、先程と変わらぬ歩調で。

少年の表情を見て、態度を感じて、自分の思うとおりになっていることに、少しだけ余裕を感じた。

「苛立っているのは判りますけど、たったの1週間と少しですよ？それに、あなたの依頼は規模が大きすぎますよ。確実に成功させるための時間を、私に下さないかしら？」

少年は何も言わず、ただ目の前に居る少女を睨みつけた。

少女はその視線を受け、自分が優位にたっていることを実感し、少しだけ愉悦した。

「化けの皮が剥がれれば、ただの短気少年ね……。でも、必ずあと9

日必要なのよ。変更はできないわ」

「なん…っ」

何で、と続く言葉をわざと遮り、少女がこの場の勝者となるために最後の言葉を紡いだ。

「もう、始まったからよ…」

その言葉を聞いた少年が、全てを察したのを少女は感じた。

始まったら、停まらない。それはもう、解り切っていることだろう。途中で後戻りなんて、できない。

銃声が耳の鼓膜を震わす中、少女は曇天を見上げた。

快晴だったその空から、今にも天から涙が零れてきてしまいそう
だ。

遠くから、二つ重なった銃声が聞こえてきた。

その銃声を合図に、ぼつり、またぼつりと雨が降り出した。

二人は無言でその場所に立っていた。雨宿りをするでもなく、ただそこで固まったように動かなかった。まるで、本当に固まってしまったかのように。

少女は雨水に濡れた前髪を右手でかき上げた。少女は全身ずぶ濡れで、濡れていない箇所など無い様に見える。

髪の前からは水滴がぼつぽつと、雨の真似でもするかのように滴っている。

少年は寂しそうに、愉快そうに、雨に濡れる少女を見ている。

少女はその視線に気付いたのか、首をゆっくりと動かして、少年を正面から見た。

「羨ましいかしら？」

少女はそう問いかけると、少年の手に触れた。触れると、そこだ

けが水に濡れた。

少年はそれを見て、何も言わずにその場から消えた。文字通り、次の瞬間には何も無かった。

少女は特に何も反応を示さず、ゆっくりと屋内へと続く扉へと歩いた。

扉には、屋内から鍵がかかっている。

ガチャガチャ、ジャラ

「お嬢様……」

扉が開かれると、中から年老いた男が出てきた。その手には、清潔なタオルと着替えが乗せられていた。

男は少女の顔を見て、少しばかり驚いた。

少女の顔は、雨水以外のものでも濡れていた。

少女は、泣いていたのだ。

悲しみで、心残りで、後悔で、不安で、焦燥で、圧力で、

——喜びで。慶びで。悦びで。

消え往く世界に別れを告げるように。

その姿はまるで、神に祈りを奉げる修道女のようにであり、神に代わり全てを包み込む聖母のようであり、消え往く世界にただ絶望するだけの民衆のようであり、世界を消すための生贄のようでもあった。

静かな小雨はやがて本降りとなる。

世界を包む優しく厳しい音は激しさを増して、これが最後とでも言わんばかりに、長く長く続くようであった。

長く、永く——

ある国のお話です。

とても古いお話です。

この緑星に来るずっと前、私たち人間は『ちきゅう』という星に住んでいました。

そこでの人々は、別々の場所で別々の言葉を喋っていました。

『あめりか』と呼ばれるところでは、英語。『にほん』と呼ばれるところでは、日本語。

そんな風に、みんな違う言葉を話していました。

今私たちが使っているのは、共通語。みんなこの言葉で話す。

…それは、今は別にどうでもいいんだけど。

これは、『ちきゅう』のお話。もっと細かく言うなら――、『にほん』のお話。

昔々あるところに、お爺さんとお婆さんが住んでいました。

…なんでお爺さんとお婆さんか？確かにそれは不思議だけど、それはまたあとで。

お爺さんはある日、山へ竹を採りに行きました。

たくさん生えている竹の中に、一本だけ。その竹の節と節の間が、金色に輝いていました。

お爺さんは、その竹の節と節の間を、バサリと伐りました。すると中には、3cm位の可愛い女の子が座っていました。

お爺さんはその女の子を家に連れて帰りました。

…誘拐とか言わないの。とりあえず今は黙って聞いてなさい。

お爺さんはお婆さんにその女の子を見せました。

お婆さんはその女の子を可愛がりました。その女の子を『かぐや姫』と名付け、お爺さんとお婆さん、二人で世話をしました。

…あれ、やっぱり寝ちゃった。

これじゃ、幾ら話しても限がないな！。

いつか大きくなったら、ちゃんと、全部話してあげよう。

結局、全部話すことはなかった。

話す前に、死んでしまったのだから。

Act・3 『考察・調査』

今の時代に、超能力なんてものは、ない。

全ての物事を科学的に証明できてしまった時代、自然災害さえその例外ではなかった。

ましてや、超能力。

どんなに凄いことをやってのけたって、それすらも科学でどうにかなることであつたりする。

魔法なんて、魔術なんて、それこそ以ての外。

それが本当に魔法であつたとしても、科学のほうが数倍優っている。

神秘という言葉すら、その神秘性が失われている。

歴史の授業でそんな事をぼやいていた先生の姿を、何故かレイオルはしっかりと覚えていた。

レイオルには、その先生が酷く落ち込んでいる様に見えた。

先生のそんなぼやきは、ある生徒には無視され、ある生徒には共感され、またある生徒には馬鹿にされた。

レイオルは、ただ黙ってその言葉を受け入れた。

無視するでもなく、共感するでもなく、馬鹿にするでもなく、ただ受け入れた。——いや、もしかしたら、レイオルは共感していたのだ。

昔のほうがよかった——と。

昔は、超能力者も、手品師も、魔法使いも、魔術師も、一部の人々にはインチキだと罵られながらも、存在し、役に立っていた。

神秘という言葉も、その神秘性が伝わってきていた。

それなのに人間という動物は、自ら夢を壊し、幻想を消し去り、

ただの現実だけの世界にしてしまった。それはあまり良い事とは言える筈がない。

心に余裕ができなくなったのだから。

科学で全て証明できる。それは、全ての物事に隙がないこと。それは、人間の知的好奇心を満足させること。それは、ある程度の物事なら、予測できてしまうこと。

人は予測し、それに備える。

しかし予想外の出来事は常に起こりうることで、備えもそれewaterの泡となりえる。

そうなれば、人は慌てる。——こんなことになる筈じゃなかった——。

そうなれば、もうだめだ。予測して行動をしてきた者にとつて、予測が外れるのは、本当に想定外の出来事。予測せずして行動するなど、不可能だ。

だから、あらゆる事柄を予測する。予測するあまり、他の物事がおろそかになる人は、そうそう少なくない。予測するだけして、何もしない。それすらも予測する人はいる。

予測を予測し、結局何もしない。自然消滅する、いたちごっこ。

だから、心は、肉体は、疲弊する。

疲弊すると、余裕なんて作れなくなる。

余裕がある。それは人が存在する上で必要な理性を保つ、最低条件。

余裕があれば、冷静でいられる。余裕があるから、冷静でいられる。

余裕がなければ、慌ててしまう。余裕がないから、慌ててしまう。人は余裕がなければ突飛な行動に出てしまう。

例えば、飛び降り自殺。

例えば、銃の乱射。

例えば、通り魔殺人。

例えば、一家心中。

普段大人しい人が、人が変わったように凶暴な人になるのは、心の余裕がなくなったから。

まだ予測ができなかった時代。

今の、予測ができる時代。

凶悪犯罪の件数は、今のほうが確実に多い。

それは、余裕がなくなったから。

余裕がなくなると、人は精神の箍が外れてしまう。箍が外れれば感情があふれ出す。溢れて、あふれて、制御できなくなる。

制御できないから、『理性が保てない』。制御できるから、『理性を保てる』。

要は、本人が感情をコントロールできるかできないか。

理性なんて、本能と紙一重。

精神学の授業のとき、友人が先生の話を見殺してレイオールに語っていた内容だ。

レイオールはそれを聴いて、「へえ」としか言えなかった。

先生の話より、教本の豪く長い論文より、友人の話のほうが解り易く、説得力があった。

先生の話より、教本の豪く長い論文より、友人の話のほうが短く、現実味があった。

それを思い出しながら、レイオールはふと思った。

あいつなら、正体を掴めるのではないか——？

そう思ったと同時に、レイオールは駆け出していた。

右手首に巻かれた携帯ツールを起動、電話で相手を呼ぶ。

キューイン、と相手が電話に答えたことを合図する音が鳴る。

「今からそっち行く。いい情報があるよ」

それだけ言うと、一方的に電話通信を切断、携帯ツールを省エネモードに切り替えた。

今から行くのは、友人の家。

第3生活地区でも3本の指に入る大豪邸。

レイオールが何度も訪れた、白壁と煉瓦の、どこか落ち着くあの
屋敷――

雨の下、レイオールはその屋敷を眺める。

『マディウエス』と書かれている、白い表札。

簡単に泥棒に入られるのでは、と思うぐらい低い柵。
柵の内側に広がる、芝生の庭。

それが、レイオールの友人の住处。

レイオールは躊躇うことなく低い柵を乗り越え、堂々と屋敷
の裏口へ向かって歩き出した。

つい最近、勉強を教えるために訪れた。それ以前にも、何十回、
何百回と訪れた。

レイオールは慣れた手つきで、古めかしい銅のドアノックカーをコ
ンコンコン、とリズムよく鳴らした。するとすかさず、やはり慣
れたように、優しくそんなおばさんが裏口のドアを開けて、レイオー
ルを手招きした。

「いらっしやい、レイちゃん。お菓子、後で持っていくからね。さ

さ、あがつて」

見た目を裏切らず優しいおばさんはそう言うのと、お菓子の準備をするためか、レイオールの視界から消えていった。

それと入れ替わりに、

「レイ、いい情報ってのは、金融関係かい？それとも治安とか？大企業の告発だったら事足りてるよ。今特に欲しい情報は…」友人が奥の扉から、のんびりとやって来た。

「……ネタとしては美味しすぎるね、それ」

善悪関係なく、情報を一つの物としてみた意見であった。

つい数十分前の出来事を、レイオールは淡々と語った。レイオールが人を殺したことも含めて。

メモを取りながら聴いていた友人の第一声が、これだった。

「『古代文明対最先端技術』ってだけでも十分注目度高いのにな、

『人類滅亡』『隕石』『お嬢様』まで加わって、相当価値ある情報になるね、これ」

友人は緊張感無くそう言うのと、メモに落していた視線をレイオールに向けた。

レイオールはその視線を、静かに受け止める。

「本当だったら、保護したいんだけど、レイオールはそうゆーの、嫌いでしょう？」

レイオールは首肯する代わりに、視線を逸らした。

友人はそれを見て、何も言わずにクスリと微笑んで、優しいおばさんが持ってきてくれたお菓子を口の中に放り込んだ。

部屋に、心地よくも居ずらい沈黙が流れる。

その沈黙は、お菓子の様に。

ほんのり甘くて、ほんのり酸っぱく。

お酒のように、どこかほろ苦かった。

「じゃー。また会える日が来るといいねー、レイー！」
「…行つて来ます」

友人に見送られ、レイオールはその家をあとにした。
雨は、もうほとんど止んでいた。

結局、確実な情報は得られなかった。しかし、可能性のある情報は幾つか教えてくれた。

レイオールは受け取ったメモを、静かに見直した。
そのメモに書かれた幾つもの住所は、どれもこれも、人通りの少ない場所だった。

近い所は100m以内、遠い所では他の地区。

——その場所に行けばねー、もっと正確で、もっと最新の情報が貰えるよー。

——…嘘も多いんじゃない？

——大丈夫ー。信頼できるところしか書いてないからー。

——…いくら位する？

——『マディウス』って名前出せば、タダでいいと思うよー。
結構有名だからねー、あたしの家族ー。

——この住所は？

——ああー、そこ？そこはねー——

レイオールは、ある建物の前でその歩みを止めた。
メモに書かれていた、一番近い住所。薄暗い建物には、人の気配が感じられない。

半開きのドアは不気味さを倍増させ、人を近寄らせなかった。

レイオールはその建物で合っているか確認して、ゆっくりと、半開きのドアから建物の中へと入っていった。

カツコツと、足音が響く。

物音一つしない建物は、意外と隅々まで掃除が行き届いていた。それが逆に、不気味だった。

しかしレイオールはしっかりと足取りで、メモに記されたとおり、二階の、右から三番目のドアへと向かった。

二階の、右から三番目のドア。

他のドアと、特にこれといった違いは無い。

ガチャン

ドアノブを左に回すと、開錠する音が聞こえた。そしてドアノブを一旦放して、今度はノブを回さずにもう一度握る。そのままドアを押すと、音も無くドアが開いた。

「いらっしやい、お嬢さん。誰からの紹介かな？」

レイオールが部屋の中に入ると、小柄で優しそうなお爺さんが声をかけてきた。

ただし、お爺さんのベルトには、小型の光線銃が無造作に差し込まれている。

レイオールは特にその事を気にした様でもなく、近くにあった木椅子に座って、お爺さんの質問に答えた。

「『マディウエス』のお嬢さんから」

お爺さんはそれを聞いて特に驚かず、ゆっくりと、にこやかに頷いた。

「なるほど、あのお嬢さんから。とするとお嬢さん、余程の事をお聞きになりたいと？」

「はい」

「では、その余程の事とは何かな？お嬢さん」

「『隕石』 『お嬢様』 『人類滅亡』—— 『大企業』で、最新の情報」

レイオールがそう言うとお爺さんは引き出しから分厚い紙束を出して、事務的にそれを読み始めた。

「『隕石』についての報告。第1生活地区に落ちた隕石については謎が多く、その噂も多々ある。もっとも有名なのは人為的に隕石を落した、というもの。不可能ではないが、莫大な資金が必要となり、目的もわからない。更にそこから派生した噂は、『大企業』が何かの目的のために人為的に隕石を落した、というものだ。やはり目的がわからないのだが、一部では『人類滅亡』を目論んでいたのではないかといわれる。」

目的が無くても隕石を落す意味を見出せるのは、何でも屋。依頼されれば、どんな事であろうとも必ず成し遂げる、闇の職業。依頼された何でも屋が隕石を落したのなら、それはある意味自然なことである。しかし依頼人の意図がわからない為、この説も有力とは言えない。しかし、この説が確かならば、隕石を落すことができる何でも屋が特定できる」

お爺さんはそこで一旦読み上げるのをやめると、レイオールをじっと見つめた。

レイオールはお爺さんの目を見つめ返した。

しばらくその部屋に、ピンと張り詰めた静寂が舞い降りた。

「お嬢さん」

お爺さんは静寂を破り、そう切り出した。

「ここからは「もしも」の話。確実ではないのだ——。残念ながら。それでも、聴くのかな？」

お爺さんの質問に対して、レイオールはゆっくりと首を縦に振って答えた。

「お嬢さんなら、そう答えると思ったよ。……では、話すしようかの、「もしも」を。」

隕石を落すほどの科学力、財力及び人脈を持つ何でも屋は世界広

と言えども、その数は三つ。

一つは『カースフィン』。財力ならばどの何でも屋にも引けを取らない。二つ目は『イリュセント』。科学力ならばどの何でも屋にも負けないが、財力はあまり無い。そして」

お爺さんは一瞬間を置いて、聴きなれない言葉を発した。

「『Dagger of Collapse』」

それは、昔の言葉。人類がまだ地球に住んでいたところに使われていた『英語』である。

レイオールは表情を一つも変えることなく、その言葉をただ聴いていた。

お爺さんはレイオールの反応を見て、何を思ったのか、今迄で一番楽しそうに笑い出した。

「アハハ、ハハ、ハハハ。お嬢さん、ハハ、気に入ったよ。普通はキョトンとしたり、何かしら変化があるものなんだが……。お嬢さん、情報提供員になってみたくなかったかな？」

「…考えておきます」

お爺さんはそれを聴いて、満足そうに微笑んだ。そして何事も無かったかのように、続きを読み始めた。

「『Dagger of Collapse』は最近起業した何でも屋だが、今では有名な何でも屋となりつつある。財力人脈、共にそろっている。請けた仕事は必ずこなす、真の何でも屋である。」

「さて、お嬢さん。お勧めは最後なのだが……」

その言葉を最後に、お爺さんは動かなくなった。

ドサツと、バランスを崩したお爺さんの亡骸が倒れた。

お爺さんの後頭部には、鈍く光る鉛球が一つ。そこから、血が滴り落ちていく。

レイオールは嫌な予感がし、とつさに伏せた。

パンッ

小さく乾いた音がし、直後にはドアのガラスが割れ散った。

レイオールはとっさにお爺さんが持っていた分厚い紙束を掴み、ドアから飛び出した。

廊下を走り、階段を下り、建物を飛び出して、人ごみに紛れ、逃げる。

人の波に逆らうことなく、同じような歩調で紛れる。さすがにここまですれば、男たちも撃ってはこないだろう。

しかし――

パンッ

――レイオールの目の前を歩いていた人が、倒れた。

「キャーーーーーッ！！」

女の人の悲鳴が聞こえる。

悲鳴は波紋のように広がり、そこそこ広い通りは悲鳴で埋め尽くされた。

パンッ

「カ…………ッ」

レイオールの隣の女が、パタリと倒れた。

後頭部には、鈍く光る鉛球一つ。

――それはまるで、

やがて鉛球は赤く染まり、輝きを失った。

鉛球の赤は、徐々に他の赤と同化して、分からなくなった。

――警告のように、

人々はしばし呆然とした後、倒れて今は死体と化した女から離れた。無論、レイオールも。

人々は怯えた。何時自分に降りかかるとも知れない鉛球と、それ

を発射する者を。

——レイオールの脳裏に、網膜に、

パンツ

音がして、また血の噴水が揚がった。今度はレイオールの斜め後ろの少年。

周囲の人々の衣服は血に染まり、感情は暗澹とした絶望と恐怖に染まった。

何人かが、通りから逃げ出した。

悲鳴が、加速する。

——こびり付いて、離れなかった。

レイオールは、群衆に紛れるしか無かった。

『義手』で襲撃者を殺すには、あまりにも人が多く、広すぎた。

けれど、レイオールは諦めていなかった。

隙を見て、襲撃者を殺すつもりだった。

話しかけられるまでは。

「レイオール・フランチェさん、ですね？」

その場に似合わない安穩とした声と、いきなり自分のフルネームを言われたことで、レイオールは警戒した。

「あの……、そこまであからさまに警戒されても困るんですけど……」

安穩とした声は、本当に困っているようだった。少なくとも、声音だけは。

だからレイオールは、無視することにした。

「ちょ、ちよつと！レイオールさんっ！話を、話を！きい………！待って、待ってください……」

無視して、通りから外れるために歩いた。猛烈なスピードでスタスタと。

逃げる人々に紛れて、レイオールはスタスタと進んだ。

「ま、まっ、ちよつ！」

後ろで叫んでいる声は充分目立っていたが、逃げることに必死なのか、誰も気にも留めない。

パンツ

また銃声が聞こえて、悲鳴が上がった。けれど誰も振り向かず、己の安全のために逃げた。

細い路地に入って後ろを確かめても、誰もいなかった。だからレイオールは油断してしまった。

「やっと話せますね、レイオール・フランチェさん」

すぐ後ろから、またあの安穩とした声が聞こえてきた。

レイオールはつい反射で、左手で裏拳を食らわせた。機械化されているので、かなり硬い。

「ううう、酷いですよ。初対面の人にこんな仕打ち、もう一人の人とは大違いですよ！」

あまりにも喚くものだから、仕方なくレイオールは振り返った。

そこに立っていたのは、一人の少年だった。

色素の薄い髪に、浅瀬のように薄い青。そこそこ格好いいのだが、鼻血が出ている。

少年はにっこり笑うと、またあの安穩とした声で喋りだした。

「ああ、やっと相手してくれる気になりましたか。粘ってみるものですね」

「誰？」

レイオールは少年を殺さんばかりの勢いで睨み、そう訊ねた。

少年は特に怯む様子も見せず、飄々と答えた。

「そうですね…。戸籍を持っていないものだから、とりあえず自称になるけど……ラミアス・カーティウス……ってことで」

「何のために声をかけたの？」

「頼み事があるから……って事で」

少年はニツコリ笑うと、レイオールの前に回りこんだ。そして、あつさりと用件を伝えた。

「人類滅亡を……手伝って欲しいんだ」

レイオールはそれを脳が完全に理解する前に、『義手』を『兵器』に変えて、直径が1？もないエネルギー弾を少年——ラミアスに撃った。

凝縮されたエネルギーはラミアスを打ち抜き、空中で霧散した。撃たれたラミアスは当然のようにふらつき、そして——

——そして、倒れなかった。

吃驚した？

ラミアスの口がそう動いたような気がして、レイオールは形容しがたい感情に囚われた。

その感情は、恐怖でもなく、憧れでもなく、畏敬でもなく、怒りでもなく、悲しみでもなく、嫉妬でもなく、喜びでもなく、嫌悪でもなかった。

何か、とてつもなく大きな何か、形容しがたい感情に囚われた。ラミアスはゆっくりと体勢を戻すと、ニツコリとレイオールに微笑みかけた。

「吃驚した？体を——しかも肺を打ち抜かれたのに、こうして立って話せる人なんて普通はいないからね。でもやっぱり痛かったよ

……」

そう、レイオールは確かに肺を打ち抜いた。それなのにラミアスは、倒れもしなければ、こうして立って話まのできている。

異常だった。

それはもはや、人間とは言えない。

別次元の生き物としか考えられなかった。

「それにしても酷いよね。用件を伝えただけで殺そうとするなんて、まともな人間のすることじゃないよ、本当にね」

ラミアスはそう言いながら、レイオールの手を取った。

機械化されている、左手を。

「とりあえず、話ぐらいは聴いてほしいな。——君にとって、損な情報でもないしね」

そう言うのと、あろう事かレイオールの左手に顔を近づけ——そのまま、軽く口付けた。

この第3生活地区に、挨拶代わりにキスをする習慣はない。

それよりも、なによりも。

レイオールは、何処であろうとキスをされた記憶はなかった。

つまり、ある意味で、ファーストキスになった。

そのためか、レイオールは左手を大きく振り上げ、ラミアスの顔にまたもや裏拳を食らわせた。

グチャリ、と肉が潰れる嫌な音がした。

「何すんの！二度と触んな！」

レイオールはそう怒鳴りつけると、細い路地の奥へと進んでいった。

残されたラミアスは鼻を押さえて、石畳の路上に転がっている。

レイオールははずかずかと、ストレスを全て脚に籠めているのではないかと思わんばかりに、足音を鳴らして進んだ。

そう、レイオールは苛々している。

仮にもレイオールは乙女なのである。

何処であろうと、最初にキスをされるもしくはするのは、自分の意思で決めたかった。

勝手に、それもつい数分前に会ったような不審な奴に、されたく

なかった。

プライドが、許さなかった。

あまりの怒りに、レイオールはその小さな音に気付かなかった。

スコツ

「レイオールさん、機嫌は直ったかな？」

安穩とした——少年の——ラミアスの声は、レイオールの前方から聴こえてきた。

数秒前まで誰もいなかった、前方から——。

「吃驚した？」

ラミアスはウキウキしたように、レイオールに問いかけた。

まるで、子供が母親に訊くかのように、楽しそうに問いかけた。

「キスの一つや二つ、何ってことないと思うけど？」

乙女心が解っていない。

レイオールはもう、遠慮も躊躇も容赦もなかった。

つまりは、この一言に集約される。

「退け」

その一言に籠もった怒気を測定できる機械があつたならば、きっと計測不可で壊れてしまったことだろう。それ程に、その一言には力が在った。

そう、それなのに。

まるで何も聞かなかったのではないかと疑ってしまうほど、少年は落ち着いていた。

そう、別次元の精神である。

「嫌だと言ったら？」

少年はニツコリと、意地悪く訊いた。

答えなくても解っているのだろう。

だからレイオールは答えずに、撃った。しかも連射である。

パンパンッパン

レイオールも、何と無く解っていた。

こいつは撃った程度では死なない、と。

だからか、留めに、顔面に思いつきり拳を捻じ込んだ。

グチャプツと、何かが潰れて砕ける音が聞こえた。

それなのに。

もう動けない筈のラミアスの指が、レイオールの服を掴んだ。

「……………っ！」

レイオールは声にならない悲鳴を残して、細い石畳の路地の奥の奥へと走っていった。

止まらず、振り返らず、スピードを上げて。

走って走って走って走って。

消えない悪夢から逃げるように。

走って走って走って進んで。

恐怖から逃れるために。

今までで一番速く、速く、ラミアスという名を持った恐怖から、悪夢から逃れるために。

レイオールは、あの男たちよりもラミアスのほうが怖かった。

「レイオールさん」

——悪夢は、続く。

Act・4 『目立たない、小さなカフェで』

「もう、やめて」

レイオールの口から、弱気な言葉が漏れた。

レイオールの身体は滑稽なまでに震えていて、今にも崩れ落ちてしまいそうだった。

「来ないで」

引き攣っている笑みは、最大限の虚勢。

それが、限界。

強いと思われた少女の、あっけないまでの精神の素直さ。

虚勢の下に隠れた純真な精神に、レイオールは折れてしまいそうだった。

プライドが邪魔して、受け入れられない状態だった。

「レイオールさ」

「来ないでって言うてるだろうがっ！」

パンッ

「話をき」

「やめてっ」

パンッ

「頼むからは」

「やめてっ！もう、やめて…」

レイオールは遂に堪えられなくなり、俯いた。

撃たれたラミアスは、何も声をかけることなく、静かにレイオールを見ていた。

「うう……っ、……っう」

遂に咽び泣いてしまったレイオールは、よろよろとその場に座り込んだ。静かに、他人を拒絶するように、独りで。

ラミアスはそんなレイオールの髪に手を伸ばして、そっと撫でた。レイオールは駄々をこねる子供のように抵抗したが、ラミアスはそれでも強引に撫で続けた。やがてレイオールも抵抗するのを諦め、疲れた子供のように泣き続けた。

どれ位そうしていたらだろうか。

細い石畳の路地で、二人はずっとそうしていた。

傍目には、恋人同士に見えたことだろう。実際には、つい数分前に出会った他人同士なのだが。

「泣き止みました?」

ラミアスの問いに、レイオールは小さく首肯して答えた。そして少しだけ間を空けて、ラミアスを上目遣いに見た。その顔は、赤い。「いきなり泣き出して、ごめんなさい」

「撃つたことにはノーコメント?」

レイオールはそれには答えず、立ち上がってスタスタと歩き出した。ラミアスはその背中を呆然と見て、慌てて訊いた。

「ちよっ…待て、何処行くんだ?」

レイオールは振り返って一言。

「来ないの?」

そのカフェは、知る人ぞ知る、穴場中の穴場。

第3生活地区のどこかにある、民家に混じって目立たない、小さなカフェ。

レイオールとラミアスは、そのカフェのテラス席に座った。「話、聴きます」

唐突に、レイオールはそう切り出した。

「レイオールさん…、やっと話を聴いてくれる気になったんですね」
ラミアスは嬉しそうにそう言った。

しばらくすると、ウェイターがコーヒーとカップチーノを持って、こちらへやって来た。

無愛想なウェイターがコトン、とテーブルに二つカップを置いたのを確認して、ラミアスは話し始めた。

「それじゃ、まず…、レイオール・フランチエさん、貴女のことから話しましょうか。」

この世界は、一つじゃない。幾つもの違う『一つの世界』が混ざり合って、今の形になっている。どれか一つでも欠ければ、必ず違った世界になる。一人一人が世界を構成しているんだけど、その中でも特に重要な役割をなす人物がいる。

『一つの世界』には必ず一人、『一つの世界』を自由に操ることができる人物が存在するんだ。僕らはその人物を『綴り手』と呼んでいる。その『綴り手』が君。ここまで、いいかな？」

そこまで語ると、ラミアスはウェイターを呼んで追加の注文をした。

「このお勧めのケーキを二つ、モンブランとミルフィーユとシフォンを一つずつと、それから……」

「誰がそんなに食べるの？」

「僕。君も何か食べたい？」

「メニュー」

「メニューを食べるの？」

「見せて」

「ハイ、どうぞ」

「チョコレートクッキーを一袋、テイクアウト。季節のフルーッタルトをホールで一つ」

「ホール！？」

「こだわりエスプレッソをポットでテイクアウト」

「ポットはS・M・Lがありますが…」

「しで」

「……そんなにテイクアウトしてどうすんの？」

「非常食」

「……」

そんなやり取りの後、無愛想なウェイターが二回に分けてケーキを運んできた。色鮮やかなケーキはテーブルを埋め尽くしていて、花壇のようにも見える。

ラミアスは、お勧めケーキである『チーズケーキ ベリーソース 添え』を口の中に放り込み、また話し始めた。

「ふふりへは」

「食べながら話さない」

ラミアスはチーズケーキを飲み込むと、再度話し始めた。

「『綴り手』は『綴り手』がいる世界……君の場合はこの世界を、自由に操ることができる。例えば、重力を無視させたりとか、生態系を変えるなんてお茶の子さいさい。その世界を消す事だってできる」

ラミアスは口を潤すためか、冷めかけたカップチーノをズズズと飲んだ。

「下品。行儀悪い」

レイオールはそれをすかさず注意したのだった。そしてフォークでフルーツタルトを器用に切り分けながら、ラミアスに訊いた。

「なんで、『一つの世界』に『綴り手』は一人だけなの？」

ラミアスはフォークでモンブランの頂を突きながら答えた。

「矛盾が生じるから。」

例えば、『一つの世界』に『綴り手』が二人になったとする。一方が『花の色は全部黄色』にして、もう一方が『花の色は全部ピンク』にしてしまうと、どうなると思う？ 結局何も変わらず、元に戻るんだ。でもそうすると、『綴り手』は『一つの世界』を自由に操ることができる」って言う定義には当てはまらない。でも二人とも確実に『綴り手』であり、一方だけが花の色を決めたならばその

色になる。

ほら、かみ合わないでしょ？つまり、矛盾する。

その矛盾を防ぐために、『一つの世界』には一人の『綴り手』つて決まっている」

「ふーん」

レイオールはフルーツタルトを口に運びながら、ラミアスの話を聞いた。

ラミアスは話が一段落ついたところで、モンブランを頂から垂直にフォークを刺した。そのままフォークを手前に曳くと、そのフォークに付いたマロンクリームをペロツと舐めた。

「食器を舐めない」

「……レイオールさんって、お母さんみたいだね……」

レイオールはその言葉を受け流し、またフルーツタルトを口に運んだ。もうフルーツタルトは、円から半円になっている。

しばらく食器と食器がぶつかる音と、風の音のみが二人を包んだ。夏の風は冷たく乾いていて、それなりに人々を快適にさせている。

第3生活地区の夏は、適温適湿で有名だ。

「前ふりはここまでです」

ラミアスは静かに、今までで一番真剣そうに言葉を発した。

「レイオール・フランチェさん……、あなたは、『この世界』の人ではない」

今まで吹いていた風は止み、それでもレイオールの体感温度はグツと下がった。

「レイオールさん、もう一度言いますが、あなたは『この世界』の人ではない。しかも、只の人ではない。レイオールさんは『違う世界』の『綴り手』。間違つてこの世界に来てしまった、矛盾を生んでしまう——『綴り手』」

ラミアスはレイオールに追い討ちをかけるようにそう言うと、ま

たモンブランの解体作業に移った。ラミアスがまたフォークを舐めたが、レイオールにはそれを注意するだけの気力は余っていなかった。

「レイオール・フランチェさん、あなたは『もう一人の綴り手』。故に——あなたは、狙われているんだ。本来の、『綴り手』から……ね」

少しだけ風が吹いた。冷たく乾いたその風は、カップチーノとコーヒーを冷ますには、微弱すぎた。

けれど今のレイオールに、そんな事を感じていられる余裕はなかった。

「嘘ですよ？そんな非現実的な話」

「嘘じゃない」

ラミアスはそう言って、

「僕も『この世界』の人じゃないからと付け足した。」

「嘘だ」

「本当のことだよ」

「ドツキリでしょ？」

「騙す必要が無いよ」

「嘘だ」

「レイオールさん、もう少し、話を聴いて」

「嫌です、馬鹿馬鹿しい」

「でも話します。」

僕も『この世界』の人ではない。けれどレイオールさんと『同じ世界』の人でもない。もっと『他の世界』の人間なんだ。

僕とレイオールさんみたいに「本来は存在しない人物」を僕らは『読み手』って呼んでいる。

『読み手』は、ほとんどの場合は、居る世界の影響をほとんど受けない。だから僕は『この世界』では飛ぶこともできるし、瞬間移動もできる。重力の影響も、時間の影響も受けないからね。

けれど、レイオールさんは別。『綴り手』だからね。

『綴り手』って、『他の世界』でもその影響を受けるし、『読み手』に触れることもできる。普通の人には、僕の姿は見えてないし、聞こえても無い。

はい、ここまでで質問は？」

しばらくの沈黙の後、レイオールは小さな、やっと聞き取れるぐらいの音量で質問した。

「何で『綴り手』って呼んでるの？」

その質問に、ラミアスは楽しそうに説明を始めた。

「それはね、能力の使い方をそのまま表しているんだよ。」

『綴り手』が世界を操るには、「操りたい、実現させたいその他諸々」を紙に書き表す必要があるんだ。例えば、さっきの『花の色は全部黄色』を実現させるには、何でもいい、何か紙に書くんだ。

『花の色は全部黄色』ってね。実現させたい日時も書き記せば——つまり綴れば、日時指定もできる。

そういうこと。だから世界を操ることができる人を『綴り手』って呼ぶ。それを第三者の視点から見ると——つまり『物語』を読む人を『読み手』って呼ぶ。

解った？まだ質問ある？」

ラミアスがまたそう問いかけると、レイオールはまた質問した。

「いる世界の影響は受けないんでしょ？それで他の人には見えないんでしょ？だったら、なぜあのウエイターにはあなたが見えてるの？」

そう、注文をとり、ケーキを運んできた無愛想なウエイターは、確かにラミアスが注文したものも持ってきた。そして、レイオールとラミアスが会話しているところを見ても、眉一つ顰めたようには見えなかった。つまり、ウエイターには、ラミアスの姿が見えていて、声も聞こえているのだ。

「ああ、それなら簡単。僕と『同じ世界』から来た『読み手』だからね。」

ラミアスはいとも容易くそう答えると、行儀悪くカップチーノをズズと吸った。

「…そうですか」

レイオールは俯き、何かを思案している表情になった。

ラミアスは特にそれを気にしない。だからレイオールもラミアスを気にしない。

「それじゃあ、次にもう一人の——本来の綴り手のことを話そうかな」

「…はい」

ラミアスはモンブランの最後の一欠片を口の中に放り込み、話し始めた。

「『この世界』の本来の綴り手。それは君よりも少し年上の綺麗な女性だよ。…まだ女性って年齢じゃないけどね。その人は自分のことを、『カシエ』って名乗ってたけど、多分偽名かな。」

僕はその人に、人類を滅亡させてくれって頼んだ」

断られたでしょ？とレイオールは訊かなかった。何故だか解らなかったが。

「そしたらその人、承諾してくれた」

レイオールは残っていたコーヒを一気に飲み干して、ラミアスを改めて見た。

飄々とした笑顔は、レイオールに最初に声をかけたときから変わらない。

それは味方にすれば心強いが、敵に回せば恐ろしいタイプである。しかも今はまだ敵が見方かも判らない。

そしてレイオールは、今目の前にいる人間を、味方に付けたい。ギリギリの心理戦になるだろう。けれど——

——それを考えると妙に高鳴る、この心は何だろう。

今命が狙われていて、目の前にいる人間との心理戦が困難を極め

そうで、親しい人には頼りたくなくて、敵の正体も解らない。

とても危険な状況を、レイオールは他人事のように楽しんでいた。

そしてそれは、レイオールの近い未来を左右する。

レイオールは高鳴る胸を押さえて、ゆっくりと質問した。

「……なんで、人類を滅亡させたいの？」

その当然の質問に、ラミアスは当然のように答えた。

「バランスが崩れたからさ。……言つとくけど、レイオールさんのせいではないよ、本当に」

ラミアスは言い終わると同時に、ミルフィーユにフォークをザックリと刺した。パリパリパリツという音がする。

「なんで、バランスが崩れたの？」

レイオールは注意することを諦めて、ラミアスに質問を重ねた。

ちなみにレイオールのフルーツタルトは残り四分の一も無く、今も徐々にその残りは少なくなっている。

「……えっと、……よく、分からないんだ」

ラミアスはそう気まずそうに答えつつも、ミルフィーユと食べかけだった『チーズケーキ ベリーソース添え』を交互に口に詰め込んでいる。味は混ざっていないのだろうか？ 気になるところである。

レイオールはラミアスの答えにやはり不満だった様だ。

「分からないって、何で？」

食べかけだった『チーズケーキ ベリー（以下略）』は先に無くなったらしく、ミルフィーユをザクザクパリパリ言わせながらラミアスは一時沈黙。

「……レイオールさん、質問好きだね」

それだけ言つて、レイオールの視線から逃れるようにまたミルフィーユをパリパリ。

パリパリパリ。

カチャパリパリ。

ゴクン。

ラミアスは先程見せた異次元の精神力の強さが嘘のように、明らかに沈黙に耐えかねている。

一方のレイオールは、冷静にラミアスを見据えている———と思いきや、いつもは感情が表に出ないその瞳を好奇心でいっぱいになっている。表情が静かな分、その好奇心の塊はよく目立っている。それに気付いたラミアスは、先程の質問を忘れようとするようにレイオールに質問した。

「レイオールさん、どうしたの？」

「……なんでもありません」

と言いつつもその視線の先には色とりどりのケーキがある。

ラミアスは質問した後にそのことに気がつき、先程の質問から逃れるように訊いた。

「……ケーキ、いる？」

「……いえ、結構です」

微妙な間こそあったもののレイオールはそう言つと、またフルーツタルトをフォークのみで器用に切り分けて口へと運んだ。そして先程の質問を再度した。

「なんで、分からないんですか？」

ラミアスは少し唸ると、唐突に顔をパツとさせてレイオールに語りだした。

「レイオールさん、 1×1 の答えが何故必ず1になると思う？」

レイオールは答えなかったが、ラミアスはそのまま続けた。

「それは1が1つあることを表す式であり、当然のように1が1つなのであればそれは只の1と何も変わらない。けれどこの世にも無意味に思える 1×1 は『この世界』にも『他の世界』にも必ず存在している。 1×1 を経た『1』と只の『1』。この違い、レイオールさんには分かる？」

分かる筈も無い。それは誰にも分からない。

「分からないでしょ？正直僕も分からない。

それと同じことなんだ。僕は誰にも分からないことを『分からない』と言っているんだから、それが何故分からないのかも伝えるに伝えられない」

「奇弁ですね」

レイオールの答えは、優しく吹いた夏風のように乾いていて冷たいものだ。た。

ラミアスはレイオールの冷たい言葉などどこ吹く風、ミルフィューをまたパリパリと口に運び続ける。

レイオールは気付かれないように、小さく溜め息を吐いた。

一体この少年は、何なのだろうか。

敵かもしれない。かと言って確証があるわけでもなく、こうして共にケーキなど食っている。普通とは思えない行動と異常な精神を見せられたと思ったら、普通の沈黙は苦手。子供っぽく振舞ったかと思えば、出任せにしては意外と筋の通った奇弁を述べる。しかも非現実的なことを——笑い話を真面目な顔で語っている。

一言で言えば、変。

親しみやすさと儚さと孤独さが喧嘩しながらも同居している、そんな感じ。

色素の薄い髪は女性のように柔らかそうなのに、海とも空ともつかない青い瞳は、男性の堅さを帯びている。

中性的な容姿。けれど男だとわかる。

やはり、変だ。

そして、厄介だ。

「レイオールさん？」

その声で、意識はすぐさま周囲に——目の前に向けられる。

そうだ、まだ問答は続いている。

「何故、バランスが崩れたから人類を滅亡させる、なんてことになったの？」

内容は馬鹿馬鹿しくて仕方がないけど、今までに起きた事を考えるとこの問答は馬鹿に出来ない。

「うーん、やっぱりその質問が来たか。

そうだね……、積み木を積み上げていつているとしよう」

「例え話と奇弁は結構です」

そう、必要な情報ではないから。

「酷い……。一番解り易い説明だったのに……。じゃ、話すよ、話す。僕たちが今いる『この世界』は、バランスを崩してしまった。過去にもバランスを崩した『世界』が幾つもあった。だから珍しいことじゃない。

『世界』がバランスを崩すと、もうその『世界』は安定できない。二度と戻れない。『世界』は綻び、徐々に消えてなくなる。それは人為的な消滅の仕方だったり、自然現象の一種としか言えない消滅の仕方だったりする。

バランスが崩れた『世界』は、例外なく消えた。

この世界も、徐々に消えつつある。もう、かつて人類が暮らしていた『地球』は消えているはずだよ。残っているのは、『中央星系』と周囲3億光年ぐらいのものさ。

これが現状。ここからが理由ね。

バランスが崩れた『世界』では、その消滅を聖書の一部に擬えて『黙示録』と呼び、自分たちが消える日を戦々恐々と待ったんだ。だから当然、精神を病む者が現れた。

精神を病んだ者は、心に余裕が無くなり、大規模なテロや大量殺戮をしたんだよ。それはそれは、盛大に、凄惨に。そして殺された者の中に、『綴り手』がいたんだ。『綴り手』は死んでしまうと、その能力を他の誰かに託さなければならない。そして死ぬ間際、一番近くにいた者は、精神を病んだ者だった。

『綴り手』になった精神を病んだ者——精神病者は、その能力を悪いほうに使ったんだ。他の『世界』を、道連れにしたのさ。

……こんなケースは幾つもある。そして道連れにされた世界も幾つもある。無関係の者たちが、これからも普通に幸せになれた者達が、殺されたんだ。

だから、そうならないようにするんだ。

『綴り手』の能力は、継ぐ者がいなければ消滅する。だから、継ぐ者もいなくなればこんなことにはならない。つまり——ひとり残さず皆殺しにすれば、他の『世界』は道連れにならない」

それは、なんて嫌な理由だろうか。

他の幸せを守るために、不幸を更にどん底の不幸にする。

ラミアスはニコリと笑っていた。

「これが理由だよ、レイオールさん。満足してくれたかな？」

異常、歪曲、恐怖。

今のラミアスには、この言葉がぴたりだろう。

やはり、ラミアスの思考は——否、ラミアス達の思考は、レイオールには不可解でしかなかった。

道ずれを出したくないのは解る。それは戦場などでも同じこと。

しかしここは戦場ではなく、普通の人々が暮らす星である。

それに、レイオールはまだ信じてなどいなかった。自らが『他の世界』から来た『綴り手』であり、その能力で世界を自由に変えられることを。信じるには根拠やその他色々なものが無かったからだ。いきなり現れた知らない人に『私は異世界から来ました。あなたも異世界の人で、特殊な能力を持っています』と言われて、それを素直にはいそうですかと信じられるだろうか？よっぽど異世界人願望があつたり人を信じすぎる人でなければ、それは難しいことだと思う。大抵はその人の頭を心配するだろう。

「レイオールさん、信じてないでしょ？」

ラミアスの言葉に、少しドキリとする。レイオールは初対面の人に対しては常に無表情で、何があるうと動じない。そして今も、リアクションの半分ぐらいは演技だったりする。

それなのに——、とそこまで考えて、レイオールは鎌をかけられていると気づいた。

「……信じてますよ」

「本当に？」

「はい」

多少大袈裟に首を振りながら、レイオールは嘘を吐いた。思ったよりも多くの情報は得られた。『世界』云々の真偽は別として、人類滅亡を目論んでいることも分かった。そして『世界』云々が本当の話だった場合、その方法も大体の予測がつく。

ならば、レイオールは何をすべきか。

——レイオールは、どうしたいのか。

レイオールは冷静に頭を働かせながら、フルーツタルトの最後の一口を咀嚼しつつ、ラミアスを見た。

甘い味が口の中に広がり、それが脳を働かせるのに役立つことを知らせてくれる。

「レイオールさん、まさか協力しない、とか言うんじゃないだろうね？」

答は決まっている。

「協力、しません」

レイオールははっきりと述べた。

これで、この少年を敵に回してしまった。

ラミアスは、静かに頷いた。まるでそれが最初から分かっていたみたいに。

「そう言うだろうと思ってたよ」

静かに、笑っていた。

「僕は個人的にはレイオールさんと戦いたくない。レイオールさん、絶対容赦しないだろうから。だから、レイオールさん、——伏せて！」

パンッ！

レイオールの耳に、聞きなれた破裂音が届く。

ラミアスが叫ぶ少し前に、レイオールは既にクツキーの袋とエスプレッソのポットを持ってテーブルの下に潜りこんでいた。

レイオールが数瞬前まで座っていた椅子の、頭があった辺りに、丸い弾痕。

ラミアスは狙われないはずなのに、なぜか一緒になってテーブルの下に潜りこんでいる。

「レイオールさん、止めるなら今日から九日間、なんとしてでも逃げ延びて。あと、『綴り手』の力で殺されるかもしれないから、レイオールさんも『綴り手』の力で自分の身を守って！」

「なんで、」

「え？」

「なんで、敵なのに私に味方するんですか？」

去る前に、これだけは聞きたかった。

ラミアスは今までで一番年相応な表情で以って答えた。

「レイオールさん、君が好きだからさ」

レイオールは、不覚にも固まった。

敵の言葉一言に逐一反応してはられないのが戦場であるはずなのに、今まで他人から——それも異性から言われたことのない言葉に、レイオールは意識的に反応できなかった。

顔が赤くなり、俯いたのは反射に等しい。

「……それじゃ、またいつか」

すぐ近くから、ラミアスの声。

そのすぐ後にはラミアスの気配なんて無く、レイオールは一人ぽつんとテーブルの下に取り残された。

パンッ

頭上でテーブルが穿たれた音と銃の発砲音。

古い映画でしか知らない鉛球の銃が、現実の痛みを伴って存在する。

レイオールは、笑っていた。

御伽噺の世界が現実に現れたとき、それはそれは滑稽なものとなる。昔の人類が現代にタイムスリップしたら、今では考えられないようなことをしでかす。

今この状況は、それと似ているのではないだろうか？

今まで信頼して依存していた『世界』が、本当はたった一人の人間の我儘でどうにでもできるのだ。しかも自分は、どうにでも出来てしまう人間であり、誰とも知らないどうにでもできる人間から命を狙われている。

考えてみれば、滑稽な話である。

何と無くで首を突っ込んだ噂話の真相を知り、それ故に命を狙われ、情報を集めようとすれば奇襲され、敵と一緒にケーキを食べて、拳句告白までされる。新たに得た情報は、自分の身の更なる危険と、全人類の危機。

まったく、何時かどこかで読んだ本の主人公は、もっと危機感を持って華麗な逃避行を成し遂げていたのに。やはりそれはフィクションでしかない。

パンッ

更なる発砲音。レイオールはすばやくテーブルから身を乗り出し、音のする方向へと左腕を向けた。左腕——『義手』を。

パンッ

音こそ実弾銃のそれだが、銃口から発せられるのはまばゆい光線。鉛弾の数十倍の威力があり、初心者には扱いにくい代物である。レイオールはそれを、躊躇いなく襲撃者へ撃った。命中すれば、重傷

で済めば僥倖にあたる。

果たして、レイオールが撃った光線は襲撃者の右側の鎖骨の下辺りに当たった。——それ即ち、肺に穴を開けたことになる。

レイオールは一瞬でそれを確認、入り組んだ第3生活地区の石畳の道へと紛れていった。

かつてこの第3生活地区で、たくさんの兵士が死んだ。

そしてその上司も、民衆の手によって処刑された。

レイオールはそんな惨い過去のある石畳の道を、ひたすらに歩き続けた。

クツキーの袋と大きな目の保温瓶と何やらとても分厚い紙束を鞆に入れることなく、手で持ち競歩のようにすたすたと歩く姿は、思わずそちらに目を向けてしまう。けれどレイオールは、そんなことを意に介すことは無かった。

とにかく、真偽を確かめたかった。

もしも本当に『綴り手』及びその力が実在して尚且つレイオールが『綴り手』なら、その力は必ずレイオールに味方するはずである。確かめるには——そこに行けばいい。

レイオールは頭の中でいくつかの仮説を生み出し、目的地を目指した。

今レイオールが立っているのは、第3生活地区の端にある、とある雑貨店の前。女の子向けの可愛らしい小物が置かれたウィンドウの向こうには、レイオールを知らない、そしてレイオールが知らない同世代の女の子達がはしゃいでいるのが確認できる。

レイオールは雑貨店に入ると、大きめの鞆とシャープペンシルと替え芯、かなりの枚数が綴じられているメモパッドを引っつかみ、偶然にも空いていたレジへ。すばやく会計を済ませて、雑貨店から出た。

ここまでの過程、五分と掛かっていない。

何故レイオルは長居せずに雑貨店から逃げるように出たのか。

——それは、レイオルの優しさ。

レイオルは、関係ない人々を巻き込みたくなかったのだ。

雑貨店に長居して、居場所がばれてしまったら。襲撃者達は無関係である女の子達を巻き込むだろう。つまり、殺してしまうだろう。それは、レイオルが望むことではない。

これから先、無関係である人々を巻き込まないようにするには、今のようにコソコソと隠れていかなければならない。見つければ、周りをも巻き込んで、無意味な撃ち合いになるかもしれないからだ。レイオルは歩き慣れた石畳の道の上で、静かに決心した。

この第3生活地区を出ることを。

レイオルは見慣れた白い土壁とそこに絡まる蔦を見て、つい数分前に決心したことを再確認した。

『人類滅亡』という大それた計画を阻止することを。

雨が降っていたのに今ではそれが嘘みたいに青く澄んだ空が夕焼けに包まれ始めるのを眺め、先程の少年について考えた。

自分は少年に対してどう思っているかを。

いずれにしてもそれはレイオルが決めることであり、他の誰がどう思おうが、関係のないこと。

レイオルはまた高鳴る胸を押さえ、静かに歩を進めた。

その先にあるものは、闇か、光か。

向かうのは、第2生活地区。

——歯車は、回転を始める。

今ではその物語は廃れ、語る人も少ない。

その物語は約4400年前にでき、その後『地球』で長く語り継がれた。

題名は、竹取物語。後の人は『かぐや姫』と呼んだ。

その物語が生まれた国について語ろう。

その国の正式名称は『日本国』、他国からは『Japan』と呼ばれていた。

島国であつたその国は、とても不思議な国だった。

物語ができた頃は、未だ他国との関わりも少なく、その国独自の文化が栄えていた。

余談ではあるが、日本は昔、海を挟んで隣接する大国『中華人民共和国』——略して『中国』に対し、日本を『日いずる国』、中国を『日没する国』と称したそう。日本で使われていた文字の多くは、中国の文字が基となっている。

竹取物語とは、そのような国で最初に創られた文学である。

書き出しは、こう。

『今は昔、竹取の翁と言ふ者ありけり』

日本でも古い部類に入る言葉を用いたその物語は、『讃岐のみやつこ』と呼ばれるお爺さんが竹やぶの中で光る竹を見つけたところから始まる。

お爺さんがその光る竹の節を切ってみると、中には3?ほどの女の子が入っていた。何故竹を真つ二つに切ったのに女の子は切れていないのか——、昔の物語を読む上で考えてはならない事の一つである。

お爺さんはその女の子を家に連れ帰り、お婆さんと共に世話をし

た。すると、女の子は見る見るうちに大きくなり、やがて美しい女性となった。

竹取物語には、まだ続きがある。しかし全てを語るには、それ相應の資料が必要になる。

今は昔。——今となつては、もう昔のこと。

全てを明るみに出すには、調査を続行するしかないだろう。

今は昔。

この物語は、かぐや姫が月へ帰ることで終わりを迎える。

今は昔。

——地球は、確かに青かったのだ。

A c t . 5 『一對の』（前書き）

夜は過ぎ来るる曙 霞晴れ 思つ面影今は遠くに

Act・5 『一對の』

小鳥の囀る声。

木々の葉が擦れあう音。

眠りにつく虫達が朝に抵抗して鳴いている。

とかく人は忘れがちであるが、自然というのは音に溢れている。

普段人々が出す音に埋もれて目立たないものの、そこには確かに生命の証があるのだ。

朝靄が晴れ、木々は濃く鮮やかな色彩を己の内に秘める。

朝陽は眩しく、眠りから抜けきれていない者を昼の世界へと誘う。
やがて朝靄は全て消え、森の色彩をより一層鮮明にした。

もう、曙はそこには無い。

朝が来て、流れるように昼へと移る。

頭に思い浮かぶ面影。

幾つもの面影。

その顔は、泣いているのか笑っているのか。

人の心の距離。

それは物理的な距離と比例するのだろうか？

一概には答えうることでない質問は、その人の主観により変化を見せる。

第3生活地区と第2生活地区。この二つの地区は昔から友好関係にあった。交流も盛んで、古くから協力し合ってきた。

そんなわけであるから、当然第3生活地区と第2生活地区の間は太く広い道で繋がれている。

レイオールはその道を通らずに第2生活地区へと向かっている。

太く広い道の両脇に広がる森は、他者から隠れて移動するには好都合である。

道から少し離れて広がる森の木々はほとんど手付かずで、時折獣が生息している証を見つけることができる。

レイオールはその中を、臆することなくひたすらに進む。木々が進路を変えさせるように生えていたり、蛇がこちらにスルスルと寄ってきたりもした。けれどレイオールは特に気にせず、ずんずん進んだ。

一晩その森の中で寝たのだ。もうどうと言うことはない。第2生活地区へ行かず森の中で過ごすことも考えたが、食料や飲み水の問題があったためにそれは断念した。それに、レイオールには目的があつた。その目的を遂げるためには、森の中で引きこもってられないのだ。

早朝の森は神秘的であり、どこか靄がかかった様にふわふわした印象を与える。

しかし見とれていては限が無い。レイオールは朝食代わりにクッキーをモソモソと食べ、歩き続けた。

森には終わりが無く、どこまで行っても奥に進んでいる錯覚にとられる。だから人々は森の中で迷うのかもしれない。

夜は過ぎ、快晴が空を満たす。

早く顔を出した『炎星』は、ゆっくりと夜に晒されていた『緑星』を暖める。

雲の無いその空が、今や三億光年しか続いていないなど、誰が信じられるだろうか？『炎星』は変わりなく照り続け、人々に恵みを与え続けている。他の星とも行き来が可能で、異状など微塵も感じられない。人間は、自らに関係のない事には無頓着である。

レイオールは、歩を進めた。

目的を遂げるため、第2生活地区と続くであろう森を。

早朝の靄の中、『この世界』の全人類の命が懸かった少女は、ただただ歩き続けた。

太く広い道のほうから、馬の嘶く平和な音が聞こえた。

第2生活地区では、今では珍しい馬車を使う者が多い。餌代などの問題で今やその数を減らしてしまった馬車は、ほとんどが観光用だったりする。

しかし第2生活地区では実用されているのだ。

かつて第2生活地区は、人が住めるのが奇跡であるような——汚い町だった。コンクリート造りの高層ビルが立ち並び、道路では車が我が物顔で法定速度を無視し、人々の雰囲気もどこかピリピリしていてあまり余所者を寄せ付けなかった。

しかし今や、第3生活地区をも凌ぐ観光都市となっている。

コンクリート造りの建物はそのままに、至る所に街路樹やら鉢植えやらが置かれ、まさに人と自然が共存しているのだ。

第2生活地区の観光都市としての歴史はまだ浅い。それこそ、百年にも満たない。

2687年、『緑星』の一部がかつて無いほどの地震に見舞われたのだ。その地震は、後に『震度8』と呼ばれる。『震度8』が襲ったのは、第5生活地区、第4生活地区、そして第2生活地区だった。

建物は倒壊を免れたが、第2生活地区の被害は深刻だった。

その時までひた隠していた地下下水道管が土地の隆起によって破損、水銀やカドミウムといった有毒物質が溶けていた下水が地上に溢れ出したのだ。

これにより住民の2割が死亡、五分は未だに入院生活を余儀なくされている、という。

これをきっかけに、当時の第2生活地区長は辞任、後に『名地区長』と呼ばれる女性が新たに第2生活地区長となった。

責任を丸投げにされた新地区長は、まず下水の処理に力を入れた。と言っても簡単に処理できたわけではない。機械を使い、人の手で、

とにかく隅々まで下水を吸い取った。そしてそれが終わると、地下下水道を撤去、関係者を片っ端からクビにした。

そこから凄まじかった。

コンクリートの要塞のような町を緑化、多すぎる税金の引き下げ、罰則の強化。

ありとあらゆる政策を行い、それだけならまだしも第2生活地区の住民に慕われたのだ。

これほどまでの『名地区長』は、きっといないだろう。

それが第2生活地区の歴史。

現在の第2生活地区の基礎となったのは『名地区長』自身なのかもしれない。

レイオールは授業で聞かされた内容をぼんやりと頭の中で思い出し、先の見えない森を地道に歩む。

朝靄が晴れつつある森の空気は相変わらず綺麗で、都会の薄汚れた空気など比ではない。

短い曙の中で、靄は役目を終えたとばかりに、森の色彩をより一層濃くした。

どこまでも果てしなく続きそうな森は、平和そのものだった。

靄が消え、鮮やかな色彩を放ち始めた木々や草花の緑は、輝いていた星の代わりに光っているようだった。

レイオールはその草花を見るときもなしに見て、今後のことを頭に思い浮かべた。

まず、第2生活地区へと向かう。

次に、そこで情報を集める。

そして出発。そこから向かう先は――

――第1生活地区。

鞆の中に詰め込まれた膨大な量の情報と、レイオールが聴いた情報。その二つの真偽を確かめるには、やはりあの場所に向かうのがいいだろう。

そして、試すことがある。

もしも『あの噂』が本当なら、紙束の中の情報の一つにも、納得がいく。

確かめるには、まだ情報が足りないが。

だからこそ、レイオールは第2生活地区へとコソコソ向かっているのだ。

そして、その後。

『もしも』が『本当』なら、レイオールはどうするべきだろうか。――決まっている。

全力を以ってして、敵と相対するしかないだろう。

それには、まず実行するしかない。

このどこまでも続くような森を抜け、第2生活地区へと向かわなければ。

レイオール自身そう思うも、実は悩んでいるのだ。

『綴り手』の力があれば、瞬間移動もできる。それなのに、レイオールはわざわざ歩くことを選んでいる。

レイオールは未だに『綴り手』の力があるかを試していないのだ。紙とペンはある。いつでもその能力は使える。しかしレイオールはその超常の力を使わず、己の力で物事を動かそうとしている。

それは、ある一種の恐れ。あるいは、半信半疑が頭の中を駆け巡っているのだ。

レイオールはその無意識下の感情を抑えられず、消極的な行動をとっている。

学習棟機戦科の優等生の面影は、薄れてしまっている。

友人といたならば、レイオールはもつと積極的に行動を起こし、

すばやく事態に対処していたことだろう。

けれど、今は違う。

単独で行動していて、未だ無意識下で信用しきれていない超常の力を持ち、敵の目的も漠然としたものしか判らない。

レイオールはこの状況で敵と相対することを恐れているのだ。

だから行動を消極的にして、その時を先延ばしにしようとしている。

レイオールは、所詮十六歳の少女でしかない。

その少女に人類の危機を押し付ける神の意図は、それこそ神のみぞ知るところなのだろう。

レイオールは前進を続けた。

延々と新緑と深緑が続く森の中、一人の少女は物思いに耽った。

——今、あの友人はどうなっているのか。

きつと、変わらず情報を操っていることだろう。

口煩い八百屋のおじさんは、店頭で野菜を並べている時刻だろう。酒屋のおじさんはトラックから酒瓶を降ろし、おばさんも店の掃除をしているに違いない。

今いるべき場所にいないレイオールを心配しているだろうか？

友人が事情を説明してくれただろうか？

もし事情を聞いたとして、みんなは心配してくれるのだろうか？

——心配、して欲しい。

心配なのは、大切だから。心配なのは、相手のことを知っているから。

心配されるのは、愛されている証拠なのだ。

そしてレイオールは、そんな人達を巻き込まないために離れたのだ。

人類滅亡なんて馬鹿げた事が起こってしまわないように、こうして歩いているのだ。

——それは、レイオールが彼らのことを大切に思っている証拠。愛し愛される普通の幸せを知っている少女が人類滅亡を阻止しようとする、最大にして数少ない理由の一つである。

レイオールは彼らの顔を静かに思い浮かべてみた。

友人はいつもののんびりとした笑顔で、八百屋のおじさんはいつものサングラスと二カツとした笑み、おじさんとおばさんは、柔らかに優しい微笑。

そして何故か、最後に思い出したその顔。

仄かに赤い頬、色素の薄い髪、青い瞳は真っ直ぐこちらを捉えている——。

その顔を思い出して、レイオールは首を振った。それ以上考えないように。そして溜息を一つ。

緩んだ歩調を引き締め、歩く速度を速めた。

無意識下の恐怖に気付かず、知らず知らずのうちに自信を失っていたその顔は、少しの気合によって幾分か輝いていた。

思い浮かべた面影。その幸せそうな面影は、レイオールの心にクッキリと『再記』され、レイオールの励みとなった。

レイオールは徐々に歩く速度を増し、いつの間にか走っていた。どこか吹っ切れたその顔は、見る人にある種の清々しさを与える。

不意に、拓けた場所に出た。

木はおろか切り株も無く、名前も知らない雑草が地面を緑に染め抜いていた。円のようで、直径は10mといったところか。

人工的に作られたような、広場を思わせる場所である。

明らかに怪しいその場所へ、レイオールは警戒しながらも入って行った。

それは畏かもしれないのに。

一步、二歩、三歩、四歩——と、中心へ近づいていたレイオールの足は四歩目を地面につけることができなかった。

では、足はどうなったか。答は簡単、単純明快にして不可解。

足は地面まで下ろされず、その10?ほど上——空中でその動きを止めた。

それはレイオール自身にも一瞬何が起きたのか理解できなかった。何しろレイオールは、自らの足が地面を踏みしめると思っていたのだから。そして、レイオールの足裏には何かを踏みしめている感触があるのだ。これを不可解といわずして何を不可解といえば良いのだろうか？

とにかく、これは異常であつた。

昨日一日だけでも不可解なことがたくさん起きた。そして今日もまた。

そして未だ常識の範疇を抜けきれていないレイオールは、その『不可解』に振り回されつつも、徐々に慣れ始めていた。

レイオールは慎重に空中に置かれた足に体重をかけてみた。足は動くことなく、その場に止まったままである。それを確認し、レイオールは心の中でカウントダウンをした。

その行動は、純粹に好奇心から来たものである。

一、

体重を空中の足へかける。

二、

体の重心を地面に取り残されている足へと移す。

三。

一気に重心を空中の足へとかけ、地面に接していた足を蹴る。その勢いと重心を移動したときの勢いで、レイオールの体は勢いよく空中へと浮ぶ。今やその体重を支えているのは、空中に置かれた

ままの足。レイオールの体は、大して高くは無いところにある足を越え、斜め上へと動く。

そして、レイオールは空中に置き去りにされた足も蹴った。更に勢いを増したレイオールの体は止まることなく前方へと進み、徐々に向かいの木々へと近づく。そして、

スタツ

そんな音が聞こえるような着地をした。そこは木と木の間。ただ子供がそうするように、レイオールは好奇心のみで跳んだ。それは、数分前のレイオールならやろうとしなかったことだろう。いくらか前向きになったレイオールは、好奇心に突き動かされるままに行動した。

好奇心が生まれる——それは、心に余裕ができたから。親しい人達の顔を思い浮かべ、自信を取り戻したからかもしれない。何がきっかけか、正確にはわからないが——今のレイオールには、余裕が生まれていた。

それは、良い事。
心に余裕があれば、必要以上に悩む必要が無くなる。樂觀ではない。余計なことに頭を使わなくていいのだ。それは、自らの行動を見直す余裕。

レイオールは、やはり歩き続けた。
無意識下の恐怖はまだあるものの、その存在は小さなものとなった。

鞆から、紙とペンを取り出す。
白い紙上に浮ぶ文字は、レイオールの筆跡でこう綴られた。

『私の大切な人達は、必ず無事であること——』

遠くへ駆けていくその姿を見て、僕は胸が締め付けられるようだった。

僕の気持ちは届いただろうか。

その言葉に秘められた魔法の力を信じ、僕もまた動き出そうと思う。

別れはまた新たな出会いを生む。

再会という名の出会いを。手を伸ばしても、届かない。物理的距離は大きな障害となりうる。

けれど、声ならば。

光には敵わなくても、音はすばやく伝わっていく。郵便物の運搬ミスがあるように、人の意思疎通にも間違いが生ずる。

意図がそのまま相手に伝わるとは限らないのだ。

けれど、それでも願ってしまう人間は弱いのだろうか？

答は、おそらく出ない。

追いかけてはならないのだろうか？

できることならば、この目で確かめたい。

けれど、それをするには今のままではいけない。

見送ることしかできない背中を空しく見つめ、それでもまだ諦めきれない。

いつか、追いかけられるように。

目から零れ落ちそうな想いの雫を、己の内に留めた。

去っていく背中。流れるような髪。

石畳の路地へと消えていくその背中に、僕は何を感じたんだろう。

銃弾の雨が止んだのを確認して、ゆつくりとレイオールさんがいたのとは別のテーブルの下から這い出てみた。

空が青い。真っ先に目に映った空は、雨なんて降っていないかったとでも言うように澄み渡っている。

そうだ。まだお会計が済んでいない。

「すいませーん」

僕が呼ぶと、ウェイターはゆつくりとこちらに歩み寄り、長い紙切れを僕に押し付けた。その長い紙切れは、今では滅多に使われない古風なレシート。

僕はそのレシートが一番下に印字された金額を見て——危うく卒倒しかけた。

いやだって、そんな…。

「嘘だ………」

「合ってますよ、金額」

そこに表示されてる金額は、大型犬が一匹飼えそうなほど高く、ボツタクリかと本気で思う。

高すぎだろ、これは。

「何で、こんなに……」

「椅子とテーブルの修理費です」

それを差し引いても、この額は常識から逸脱してる。僕自身も常識から逸脱してるから何とも言えないんだけど。

「冗談…ですよね」

「いえ、合ってます」

本当にこの額らしい。冗談にしか聞こえない。

僕は溜息一つ、しぶしぶ席へと戻ってまだ食べれそうなケーキを食べた。どうせ払うなら、キッチンと食べた額を支払いたいからね。

無傷で残っていたシフォンを口に運びつつ、レシートを順に見ていく。

お勧めケーキが二つ、モンブランが一つ、ミルフィーユが一つ、シフォンが一つ、フルーツタルトがホールで一つ——これが一番

高価らしい――、クッキー一袋、コーヒ一杯、カップチーノ一杯、こだわりエスプレッソポット、椅子とテーブルの修理費。何故これだけでこんな額になるんだ。本当にボッタクリなんじゃ？ふわふわしたシフォンとは裏腹に、僕の気持ちはガッチガチ。頭を抱えなくなる。

だけどこのまま悩んでも仕方が無い。

シフォンの最後の一口を口へ運び、咀嚼。飲み込み顔を上げたときには悩むことは何も無い。

「お会計」

と言いつつ、昔から変わらず使われる硬貨と紙幣を必要分財布から取り出す。

近寄ってきたウェイターに硬貨と紙幣を押し付け、僕はゆっくりと歩きだす。

行く先は勿論、『あの場所』。

去っていった背中を脇の裏に描き、僕はレイオールさんの前でそうしたように、飛んだ。

着いた先は、第一生活地区の公衆便所の一室。外に出ると、家族連れで賑わう公園だった。

平和を絵に描いたら、きっとこうなるだろう。

そんな光景をぼんやりと眺めつつ、僕は『あの場所』へと歩いている。

きっとそこには、レイオールさんもいるだろう。

……緊張するな……。

僕は何であの場であんなことを言っただろう。

後悔しているわけじゃないけど、今思うと恥ずかしい。

ま、いつか。

いつそ開き直ってみようと思う。

それでだめなら、その時はその時。

計画性が皆無だけど、気にしたらおしまいだ。

さっきの大出費のことなんてどこへやら、僕の心はウキウキと軽い。

これからする事を考えれば、それは何だか色々間違っているけれど。

それでもあの背中とか顔とか声とか仕草とか、思い出すと甘く苦しくなる。

どうしようも無いぐらい、僕は『恋』してしまったらしい。

……どうしよう。

今からでも反側するべきか、悩んでしまいたい。

悩まないけど。

僕は僕がしたいようにするし、したくないことはしない。

きっと僕は――

ヒュンッ

目の前をボールがすごい勢いで横切った。当たらないとわかってはいても、思わず避ける。

そう、ここは公園の中。

ボーッと歩いていては、いつ誰とぶつかるか分からない。滅多なことじゃぶつからないけど。

緩みまくっていた気を引き締めて、歩いてみる。

ヒュンッ

またボール。敵襲か？と周りを見渡すけど、子供達が遊んでいるだけ。

――あ。

すっかり忘れてた。と言っか、考え事をしながら歩くとろくな事にはならないらしい。

子供達が遊んでいる中を歩けば、当然子供達とぶつかりやすくなる。

いつもなら公園でも端のほうを歩いているのに、いつの間にやら中心を堂々と歩いていたらしい。

恋の病とは、恐ろしい。

簡単なことさえ気がつけなくなるのだから、全くもって、恋とは危険なものである。

一人考察しながら歩いていたためか、いつの間にやら子供達は遠く、公園の出口も近かった。

そのまま出口を出て右に曲がる。交通量が多いなあと頭のどこかがそんなとりとめもないことを考えていると――

誰かにぶつかられた――？

そう、ぶつかられた。

決して干渉されないはずなのに――。

僕は思わず振り返った。期待は大きい。

そこにいたのは――

「何だか楽しそうね？良い事でもあったのかしら」

――カシエ。

「……人の顔を見て露骨に落ち込むなんて、失礼よ」

いや、だって、うん、そうだよ、そうだよ……。

レイオールさんが『綴り手』の能力をすぐさま使うわけ無いよね……。

「……僕、そんなに落ち込んでます？」

「ええ、かなりよ。何を期待したのか知らないけど、こっちとしてはいい気がしないわ」

「はいはい……」

カシエはそのままずんずんと進んでいくので、僕も慌ててついていく。

「第一生活地区へはどんな用事が？」

皮肉をこめて言ってる。

けどカシエは動じた風も無く、ただ淡々と質問を質問で返してきた。

「あなたこそ、こんな隕石騒動の後の街へどんな用かしら？」

あー、だからこのヒト苦手なんだよなー。レイオールさんとは違った意味で駆け引きがしづらい。

「ちよつと……ね」

「……そう」

僕は心の中で溜息を一つ。隣の人がレイオールさんだったら、とついつい考えてしまう自分がいる。

それっきり会話は無く、どこへ行くでもなくブラブラ。

僕はカシエについて行ってるだけだから、どこへ向かっているか分からない。

「……何処へ向かってるんですか？」

「……滅び行く世界の片鱗を見に、よ」

「そうですか」

どこか希薄な声になってしまふ。いまいち会話が盛り上がりなくて、僕としては早くこの人と別れたい。けどこの人は大切な商売の相手で、『他の世界』の命運を分けるのだ。

それにしても、滅び行く世界の片鱗なんて、詩的なようでは言い得ている。

実際に『この世界』は、もう既に滅びつつあるんだから。

しばらく歩いた後、だだっ広い場所に出た。

そこは土が剥き出しで、枯れた草木がちらほらと乗っかっている

ような場所だった。

まさに、片鱗。

『この世界』の滅びは、『緑星』まで到達しているのだ。いつか枯れた草木も消え、海面も下がり、コンクリートも風化したように消えてなくなる。

滅ぶのだ。

そして人類も、精一杯抗った後に消えてしまう。

僕は——僕は、それが『他の世界』へ及ばないようにするだけ。

滅びは止められない。たとえ『綴り手』であろうと。

カシエと別れた後、僕は適当に店へ入っていった。

勿論、その店員は『読み手』。

知り合いは少なかったが、それでも『綴り手』以外の人との会話は盛り上がった。

「よう、あんちゃん。計画の調子はどうだい？」

「まずまずです。一人は乗り気なんですけど……」

「あー、分かった。もう何も言うな。あれだろ？『他の世界』のお嬢ちゃん。こつちでも有名さ」

こうして計画の話が気軽にできる人物がいると、なおさら楽だ。

「枝豆一皿。……レイオールさんにはこつちも苦労しますよ」

「あいよー。……お前も厄介な役を押し付けられたよな」

「本当に厄介です」

「ははは」

レイオールさんの名前を出してしまい、思わず別れ際のことを思い出してしまった。必死になって思い出さないようにしていたのに。

「……お前さん……その様子じゃ、『他の世界』の嬢ちゃ」

「違います全然そんなことはありません！」

「……俺まだ最後まで言っていないぞ？」

「……」

しまった。年の功には勝てそうに無い。

「……お前も大変だな」

「………ハイ」

恥ずかしい。運ばれてきた枝豆に手が付けられない。

対面に座る話し相手である壮年の男は、少佐である。僕みたいな下っ端ではないのだ。

「……お前さんに、一つ話してやろう」

と言いつつ、少佐は僕の枝豆をゆっくり食べている。話とは説教だろうか？

「お前みたいな経験をした奴は、他にもいるぞ」

「………はえ？」

一瞬、何を言われたのか分からなかった。そして次の一瞬で、それが説教ではないことを何と無く悟った。

「お前さんみたいに『綴り手』に首ったけになった兵は結構多い。そんでもって恋慕を優先させようとした奴もいたし、計画を優先させようとした奴もいた。俺はどっちも正しいと思ってる。」

……お前さんはどうするんだい？」

その言葉が、やけに重く胸に残った。少佐はゆっくりと枝豆を食べながら、続きを話す。

「俺はお前がどっちを選んでもいいと思ってる。しかしお前はまだ若い。必ず二者択一じゃないんだ。妥協案やらなんやら見つけて、お前さんがこうしたい、と思ったことをやり通せ。……例えば俺を敵に回しても、だ。その覚悟が無いなら、その恋慕は邪魔なだけだ」

……なんて少佐と言う階級に合わない、下っ端思いの言葉だろう。僕も枝豆を食べる気になってきた。とりあえず三つ入っているのから食べ進める。

……アレ？少佐って今枝豆を運んできたから……。

「……少佐はここで働いているんですね？一緒に枝豆食べちゃっていいんですか？」

「……。細かいことは気にするな」

ダメなのか、少佐。

「それよりお前さんは、本当にどうするつもりだい？お前は計画に必要な不可欠だが、同時に計画の中で最も予測できない。なぜならお前には選択肢があり、それを決められる。

他の誰かがどうしようとも、お前が全てどうにかできるんだ。

改めて訊く。お前は、どうしたい？」

その問いには、しばしの時間を要した。

会話の流れからすると、それは話を逸らすための質問であるように思える。実際にそうかもしれない。けれど言葉の重みは話を逸らすためだけにしては重く、そして辛い。

僕だって仲間を裏切りたくない。かといってレイオールさんを助けたくない訳ではないんだ。

今は、こう答えるしかない。

「…妥協案を見つけないです」

「……そうか」

僕は何だか、即答できなかったのが恥ずかしかった。

本当に我を忘れるほど恋情に支配されていれば、きっと即答できただろう。けれど現実はどうはいかない。

僕には仲間がいて、現にこうして会話ができる相手がいる。そして僕自身の身の危険、それに巻き込まれるレイオールさんの危険。

……レイオールさんのほうは、杞憂かもしれないけど。

とにかくそういうものを考えると、即答するのは難しい。

ここはゲームの中じゃない。現実だ。

クエストをクリアすれば良いだけのゲームと違い、現実はそのに『関係性』『金銭』『地位』『名誉』そして『感情』が複雑に絡み合う。アイテムを手に入れてモンスターを倒して終わり、じゃない。それこそアイテムなんか無いし、モンスターもいない。倒せば世

界全体が揺るぐため、縛り上げるだけに留めなければならぬ敵もいる。それだけじゃない。

目に見える敵はおらず、己が敵となりうる事だってある。

現実には、複雑なのだ。

だから即答できなかったのも、当然ではある。

けれど、それでも恥ずかしく思ってしまう。

「……正直、」

少佐が口を開いた。

「正直、お前さんならいい妥協案が見つけれられると、俺は思う。そうであって欲しい。俺だって味方と戦いたくは無いさ。

もう一度言う。お前さんはまだ若い。若いから、今のうちにできることをしとけ。俺みたいな年になる前に、な」

「……はい」

僕は何だかホッとしていた。少佐の言葉は、不思議と励みになる。

「少佐」

僕は枝豆を口に抛りながら、感謝の意を伝えた。

「ありがとうございます」

「……ハハハ、俺は良いことなんざ言っていないさ。感謝されても、困る。感謝するぐらいなら、幸せになって俺にその幸せを分ける」

「……了解」

少佐は、父のように頼もしかった。

Act・5 『一對の』（後書き）

過ぎ去りし君の背中に送る声 届けと願い君を見送る

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7255j/>

廻る荒廃、甦る平穏

2010年11月23日12時25分発行